

地域連携企画第 3 弾

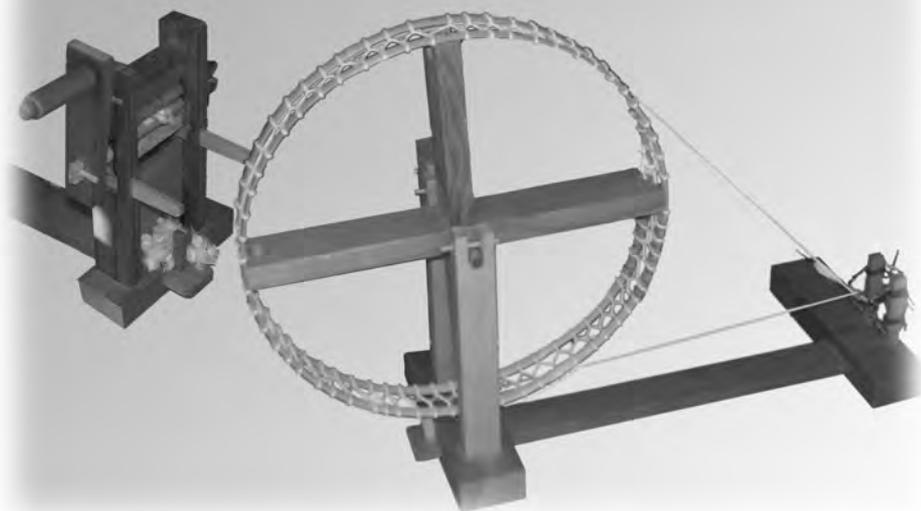
# もめん博物館 in 平野

2007 年 10 月 28 日

もめん博物館報告

町ぐるみ博物館体験記

町ぐるみ博物館各館の取り組み



七  
博  
人  
物  
館  
in 平野



## ごあいさつ

大阪市平野区は、戦国時代に開削されたといわれる環濠や、懐徳堂とともに大坂を代表する私塾・含翠堂のほか、杭全神社や大念佛寺などが知られています。近世の平野郷は、河内木綿の一大集散地でもあり、環濠と平野川を利用した水運で繁栄した地域です。

今回で第3弾となる地域連携企画は、2007年10月28日に「もめん博物館 in 平野」として、平野の地で行いました。この企画は「平野の町づくりを考える会」が主催する「平野 町ぐるみ博物館」に参加したもので、全興寺の境内をお借りして、河内木綿の歴史を解説したパネルや河内木綿の布地を展示しました。同時に綿くりや糸紡ぎ、染色などの体験コーナーも設置したところ、多くの方がたに参加していただきました。

本書は「もめん博物館 in 平野」の報告であり、「平野 町ぐるみ博物館」に参加されている各館の取り組み方などのお話を掲載しています。聞き取り調査に協力していただいたそれぞれの博物館の担当者の方がた、そして本企画の開催にあたり、快く境内をご提供いただいた全興寺の川口良仁住職をはじめ、「平野の町づくりを考える会」の皆様には厚く御礼申し上げます。

2008年3月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
センター長 高橋隆博

#### 例言

- この「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper No.6」は地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」の報告書である。
- 本文中、「P.D.」は関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターのポスト・ドクトラルフェロー、「R.A.」はリサーチ・アシスタントの略である。
- 本書の編集は関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター R.A. の影山陽子が行ない、同センター平成19年度インターンシップ生の岩下夕岐子・田中美帆が補助した。

#### 執筆担当

- ・影山陽子（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター R.A.）  
P8, 26, 27, 29, 30, 33～36, 38, 39, 44, 45
- ・宮元正博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター R.A.）  
P6, 7, 28, 29, 31, 41～43, 46～49
- ・岩下夕岐子（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター インターンシップ生）  
P9～12, 32, 36, 37
- ・田中美帆（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター インターンシップ生）  
P9～15, 25, 26, 39, 40

地域連携企画第3弾

## もめん博物館 in 平野

### 目次

平野 町ぐるみ博物館の概要	6
もめん博物館報告	8
町ぐるみ博物館体験記	16
町ぐるみ博物館各館の取り組み	25
河内木綿と平野郷	44

## 町ぐるみ博物館の概要

# 平野 町ぐるみ博物館の概要

平野区は大阪市の南東に位置する、市内最大の人口を抱える区で、その地名は平安時代末期にまでさかのぼるといわれている。「平野 町ぐるみ博物館」は平野区の平野本町を中心に平成5年（1993）から開催されている「エコミュージアム」である。これは、ある地域の文化について地域全体を博物館に見立て、住民が主体となって、保全や研究を行なう活動のことで、生態学や環境を表すエコロジー（ecology）と博物館（museum）がその語源となっている。

主催の「平野の町づくりを考える会」は、チンチン電車の愛称で親しまれ昭和55年（1980）に廃線になった南海平野線の駅舎保存運動を母体に発足した団体で、地元に住む人たち（もしくはかつて地元に住んでいた人たち）で運営されている。一般に町づくり・町おこしというと、資料館や博物館などを建設して、地域の文化をアピールすることが多いが、平野 町ぐるみ博物館では現時点でそういった「ハコモノ」は作っていない。そういう場所にもものを集めてしまうと、地域の文化を、そこに住んでいる人たちが自分たちのものとして意識できなくなってしまう可能性

があるからだという。

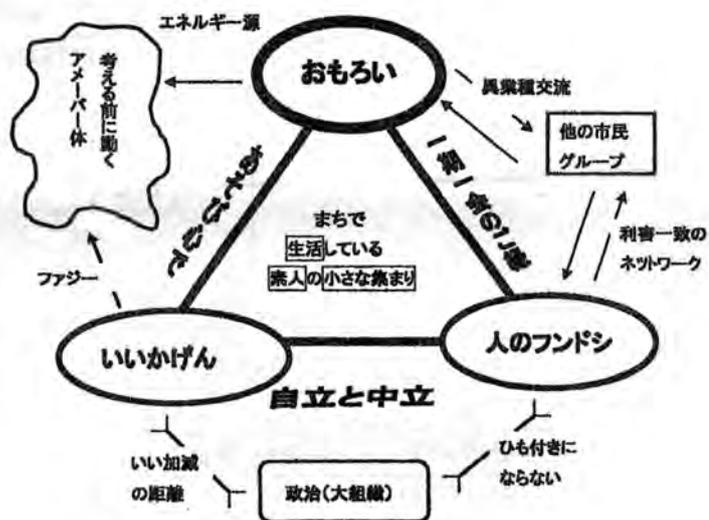
「平野 町ぐるみ博物館」の目的は観光化して人を呼ぶことではない。長い間自分の暮らしてきた地域の文化は、空気のように意識されることが少ないが、それらを客観的に見る機会をつくることで、自分の住んでいる町のよさや特徴を再発見することができる。つまり、地域に住んでいる人たちに、自分が住んでいる町の歴史や文化を知ってもらうことこそがテーマとなっている。また、外から町を訪れる人たちと地元の人たちとのふれあいを大切にしたいという思いもある。町の中を歩いてみるとわかるが、案内板などはほとんど設置されておらず、目的の博物館になかなかたどり着けない。そこで、町の人たちは道を尋ねられることになるわけだが、そういったことが、もっと自分の住んでいる町を知ろうというきっかけになるとの考えからである。

そして、「平野の町づくりを考える会」事務局の川口良仁氏は「平野を訪れる人たちには「観光」ではなく、「感風」してほしい」という。その言葉には、音やにおい、雰囲気など、目に見えないものを感じてほしいという思いと、目に見えないものこそが歴史や文化を構成する大事な要素なのだという思いがこめられている。

また、「平野 町ぐるみ博物館」には「町づ



平野区の位置



町ぐるみ博物館概念図（川口氏作成）

くりの三原則」がある。1つ目は「おもしろい」ということ。民間団体が自己資金で運営していく場合、義務や責任感だけではなかなか続かない。しかし、自分が面白いと思うことをやっていけば続けていくエネルギーが生まれ、苦労もまた楽しいのだという。2つ目は「いいかげん」にやるということ。ガチガチにルール化してしまうと、融通がきかずにやりたいことができなくなってしまうが、骨組み以外の部分をあいまいな領域にしておくことで、新しいことに挑戦していくマージンをもたせておくのである。最後のひとつは「人のふんどしで相撲を取る」ことである。これは簡単なようで実は難しい。

こういった三原則を持つ「平野 町ぐるみ博物館」は積極的に行政の手を借りないという特徴も持っている。もちろん、すべて頭ごなしに拒否するわけではなく、いいアイデアなら取り入れる柔軟性は持っているが、行政が絡んでくると、どうしても入場者数だとか、経済効果だとかいう成果が求められてし

まう。そういった「ひもつき」の状態にならないために、自治体とは適度な距離を保っているそうである。

この「平野 町ぐるみ博物館」は毎日開催されているわけではない。商店などが運営する博物館は毎日開館しているところもあるが、基本的に毎月第4日曜日が開催日となっている。常設館は15館（2008年3月現在）であるが、年1回、8月には大規模に開催され、平成11年（1999）に開催されたときに100館を数えたこともある。

急激な都市化とグローバル化の中で、日本ではどの地域でも独自の文化を守っていくのが難しくなっているといわれている。それは形を変えつつも、まだかろうじて残っていて、再発見される日を待ちわびながら、徐々に風化しているのではないだろうか。「平野 町ぐるみ博物館」はそういった失われつつある地域の文化遺産を守り、次の世代に伝えていくための、モデルケースのひとつであるといえるだろう。



平野町ぐるみ博物館ガイドマップ（第14版）

## 「もめん博物館」コンセプト

河内木綿は平野区の区花にもなっており、地域に根ざしたコンテンツであるといえる。当センターではこれまで、八尾市植田家旧蔵の河内木綿などについて八尾市歴史民俗資料館の李熙連伊氏と連携して研究を行っており、マイクロスコープを用いた調査など、新たな河内木綿研究の方向性を模索している。

「もめん博物館」では、河内木綿生産のうち基礎の部分となる綿繰りと糸紡ぎを体験することができ、染色についてもその技術の一端に触れることができる。それらの技術遺産を通じて地域の文化遺産について興味を持つ人が増えれば、広い意味でセンターの研究を地域に還元することにもなる。

以上のコンセプトを持って、地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」を企画した。日程については、屋外での体験のため、気候がよく、かつ染色体験に使用する水の水温が低くなりすぎない、10月に調整した。

### 1. 開催日時

2007年10月28日(日) 10:00～16:00  
(「町ぐるみ博物館」の開催時間に準拠)

### 2. 開催場所

全興寺境内本堂脇

テントを立て、地面に置いた木製の床台の上に畳2畳を敷いたスペースを用意。

### 3. 体験

#### ●綿くり体験 (10:00～13:00)

- ・テント内、畳の上
- ・1名20g配布した河内木綿の実綿を、綿くり機で綿と種にわける。
- ・種は持ち帰ってもらう。
- ・実綿は個袋に詰めたもの。「河内木綿の育て方」を同梱。

#### ●糸紡ぎ体験 (10:00～13:00)

- ・テント内、畳の上

- ・米綿を木綿糸に紡ぐ
- ・紡げた糸を持ち帰ってもらう
- ・紡げた長さに応じて景品(なにわ伝統野菜の飴)を配布。

\*河内木綿は紡ぎにくいので米綿を使用

#### ●染色体験 (13:00～16:00)

- ・テント外、ビニールシート上
- ・木綿の白無地ハンカチを染料で染める
- ・染料は赤・青・黄の3色の科学染料(ソメロン)を使用。バケツに入れておく。
- ・基本は絞り染め。ハンカチの染め見本を5枚ほど展示。
- ・洗いは下洗い→中洗い→仕上げと3段階に分けたバケツで洗う。色が付いてきたら順送りにし、廃液はポリタンクに入れて持ち帰る。
- ・乾燥させる時間がないため、チャックつきビニール袋で持ち帰ってもらう。

### 4. 展示

#### ●着物の展示

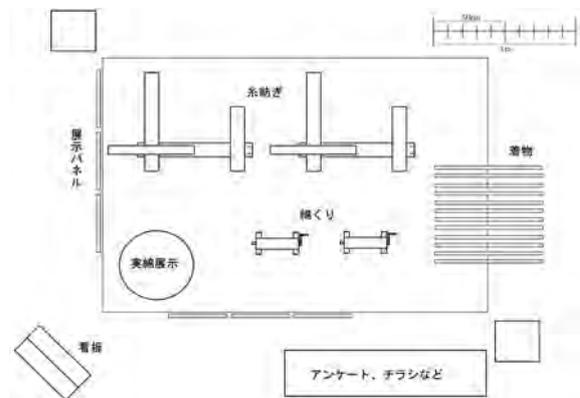
- ・植田家から寄贈された着物類の中から、木綿の着物を選んで展示
- ・比較対象として、麻の着物、絹の着物も展示する。

#### ●実綿の展示

- ・カゴに入れた河内木綿の実綿を展示

#### ●河内木綿の子供向け解説パネルを展示

- ・河内木綿について (A3パネル2枚)
- ・木綿の種類について (A3パネル3枚)



全興寺境内内・会場レイアウト

## もめん博物館当日の様子

この企画を8月に立ち上げてから2ヶ月間にわたって様々な準備をしていき、なんとか10月28日を迎えることができました。この日に全興寺さんの境内の一部をお借りして、もめん博物館を出展させていただきました。

出展内容としては、もめんによって織られた着物や羽織、八尾市立歴史民俗資料館で収穫された綿花などを展示しながら、実際に綿くりや糸紡ぎができる体験ブースを設け、午後からはもめんのハンカチを使って染色体験ができるようにもしました。



全興寺境内で開いたもめん博物館

### 綿くり・糸紡ぎ（10時～16時）

10時から開館とし、スタンバイしていたのですが、なかなか人が博物館の前を通らず、のんびりとしたムードで始まりました。人通りが少ないので、こちらから呼び込みをはじめました。記念すべき来館者第1号となったのは小さい男の子を連れた親子連れの方でした。男の子が綿くりに興味を持ってくれ、おぼつかない手つきで綿くりのハンドルを回して一生懸命に綿から種を取り出していました。その作業が楽しかったのか、自分で取り出した種を嬉しそうに持っていたポシェットに入れて持って帰っていました。

次第に人通りも多くなり博物館を覗いてくれるお客様が増えていきました。ご年配のお



綿くりの様子

客様の中で糸車を見て「なつかしい」と言ってくれる方が多くいました。子供の頃に家に糸車があった、お祖母さんが糸を紡いでいるのを横で見ていたなどのお話を聞くことができました。

お昼を過ぎたころからは、同じ全興寺さんの境内にあるおもろ庵に遊びに来た小学生など、多くの子どもたちが綿くり・糸紡ぎを体験してくれました。一人分として用意していた綿の種を全部取り出してもまだ足りないという子や、糸車をやたらと回す子など、みんな元気があふれていたと思います。子供たちと話していると、糸紡ぎをするのは初めてではないという子が何人かいました。学校で糸を紡いだことがあるのだそうです。紡ぎ方を教えようとする「一人でできるから大丈夫」と言われてしまい、私はただ横で見ているだけ、ということもありました。自分で紡いだ糸を「ミサンガにしたいから持って帰る」と嬉しそうにしてくれる子もいました。



糸紡ぎの様子



糸紡ぎ・綿くりをする子供たち

当初、綿くり・糸紡ぎ体験は染色体験が始まる13時までの予定でしたが、あまりの人氣に、もめん博物館自体の終了時刻まで継続しました。それでも子どもたちはまだまだやり足りない様子で、最後まで人の出入りが絶えることなく、もめん博物館は大盛況の内に終えることができました。

### 染色体験（13時～16時）

昼過ぎからは、「染色体験」も、午前中から続けていた「糸紡ぎ」や「綿くり」と同時進行し始めました。この「染色体験」は、もし当日雨が降れば中止かテント内の狭い場所でやらざるを得ない予定だったので、「町ぐるみ博物館」当日が好天に恵まれたことは良かったと思います。



染色体験

「染色体験」とだけ聞けば、伝統的な難しい作業を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし作業は至って簡単なもので、まずハンカチを折り畳みや絞り染め等、

好みによりさまざまな模様仕上げる為にクリップと輪ゴムと小石を使い、染まる部分と染まらない部分に分ける作業をします。そのハンカチを、用意された赤・青・黄色の3色の染料に浸け、染料が十分に染み込んだ10分から15分後に定着液に浸すだけで一連の作業は終わります。

このように、作業自体は容易ですが、ハンカチのサイズから模様の付け方、更には色までも工夫次第で何通りもの仕上がりがあり、また、その出来上がった品を持ち帰る事が可能であるという点に、「染色体験」の人氣の秘訣があったのではないのでしょうか。実際、子供からお年寄りまで、総勢50人余りもの



絞り例

方々が、「染色体験」に参加され、思い思いの作品を楽しそうに作っていらっしゃいました。中には、細かい総絞りの模様を作ろうと、何十分も時間を掛け丁寧に輪ゴムで止めていく子供や、用意された赤・青・黄色の3色では物足りず、二度浸けをして紫色に染める方の姿も目に留まり、子供たちの集中力や考える力が低下していると言われている今の時代にこのような光景を見る事ができて、開催者側の立場としては申し分なく喜ばしいことだったと思われます。また、その他40代くらいの方々も夢中に染色に取り組んでいらっしゃいました。

この「染色体験」も「もめん博物館」の一環として行なっているので、コンセプトはもちろん、区の花でもあり、江戸時代末期から

この地方で盛んに栽培されている綿について知るという体験を通して、子供からお年寄りまで、地域の方々の交流の場として楽しんで頂ける事を第一目標としていました。なので、ターゲットの一方である子供たちが参加したくなるような企画を考え、「染色体験」が提案されました。「染色体験」には天候次第で中止の可能性もある上、大量の水の確保の問題、染色液の処理等、いくつか問題点もありましたが、全興寺の御協力もあり、どうかか



全興寺の山門前の看板



ハンカチを染める子ども

無事、開催でき、感謝しております。更に、昔、商業として綿を取り扱っていた時代は、綿を育て、紡ぎ、糸を作るまでが一つの行程であり、染色はまた別の付随的な作業で、木綿そのものと直接的な関係があるわけではないことも十分に分かっていましたが、結果として、「染色体験」を選ぶことで、たくさんの方々に喜んで頂き、私自身も、地元の方々とのふれあいや、当日までに行なった染色実験で楽しい経験ができました。ただ今思うと、今回

はハンカチを浸けている時間に他の博物館を回って来てもらうくらいのことしかできませんでしたが、もっと博物館同士が連動している何かができればより良かったかもしれません。

「もめん博物館」全体としても、私たちが考えて出展した博物館を媒体として、たくさんの方々の参加の方がたの思い出やコミュニケーションの場を作る手助けをさせて頂けたことに、今回、私の中では、もっとも達成感を感じております。御協力頂いたたくさんの皆様ありがとうございました。そして、これからも、「町ぐるみ博物館」には地元の方がたをつないだり、他地域の方々に伝統や町そのものを紹介できる行事として頑張りたいと思います。



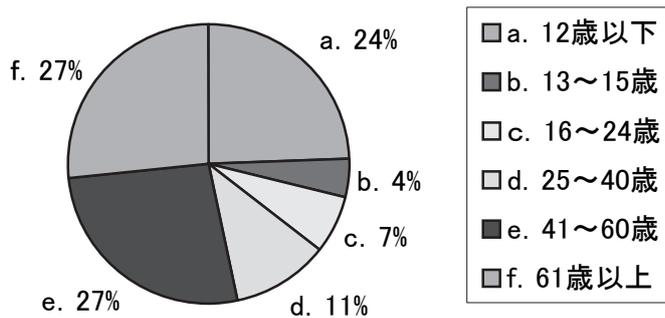
当日小学生が染めたハンカチ



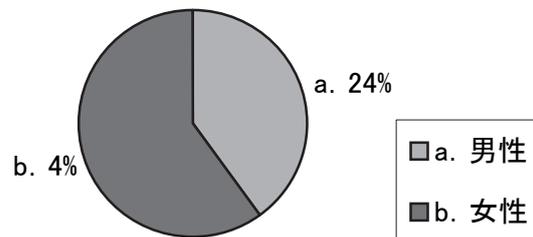
アンケートは、各PD・RAが町ぐるみ博物館の散策をしながら行なったものと、本部となっていた全興寺境内内もめん博物館で行なった。結果はその集計である。調査場所に偏りがあるため厳密なものではないことをご了承いただきたい。

なお、回答を得たのは45名である。

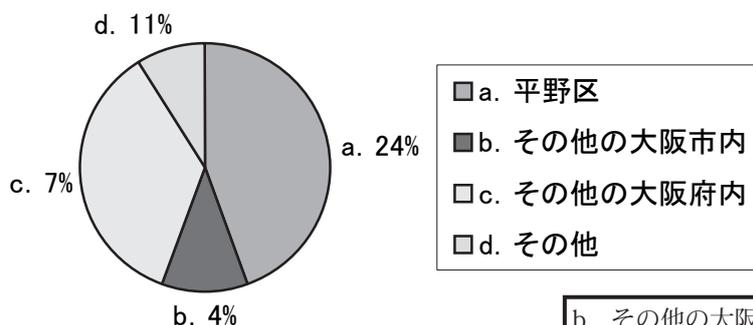
### ①年齢



### ②性別

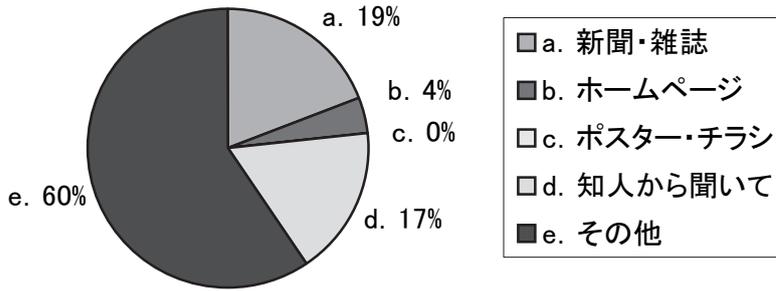


### ③居住地域



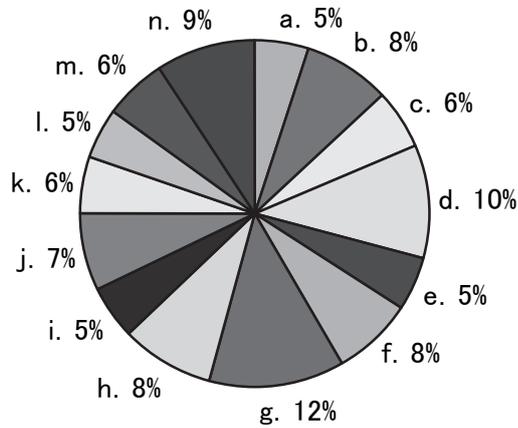
b. その他の大阪市内うちわけ					
生野区	西成区	天王寺区			
1	2	2			
c. その他の大阪府内うちわけ					
河内長野	豊中	堺	貝塚	八尾	四条畷
1	3	2	2	2	1
d. その他うちわけ					
兵庫	奈良	伊丹	尼崎		
2	1	1	1		

④情報源



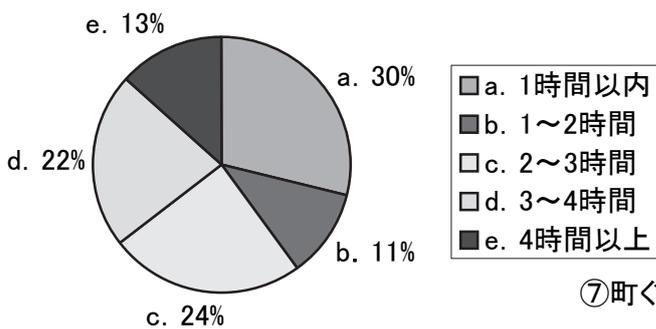
e. その他うちわけ	
通りがかり	8
本	4
地元の情報	3
区役所	2
テレビ	2
楽しそうだから	2
友達と	1
おも路地に来て	1
家	1
幹事より(団体)	1
無回答	3

⑤回った(回る予定)の博物館

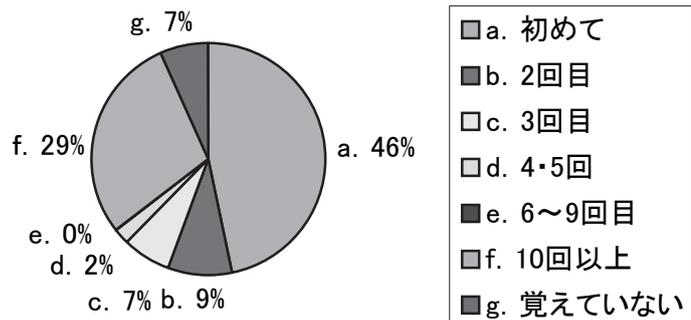


- a. パズル茶屋
- b. 平野映像資料館
- c. 自転車屋さん博物館
- d. 新聞屋さん博物館
- e. 暮らしの博物館
- f. 鎮守の森博物館
- g. 小さな駄菓子屋さん博物館
- h. 和菓子屋さん博物館
- i. 平野の音博物館
- j. 町家博物館・今野家
- k. 郵便屋さん博物館
- l. 珈琲屋さん博物館
- m. へっついさん博物館
- n. もめん博物館

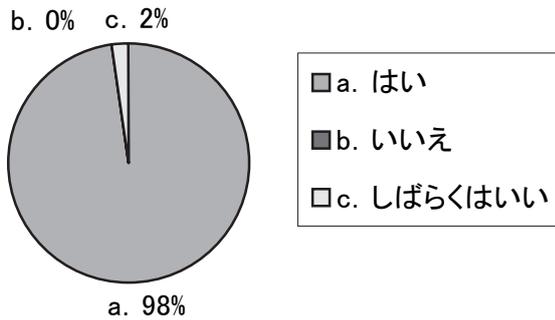
⑥滞在時間



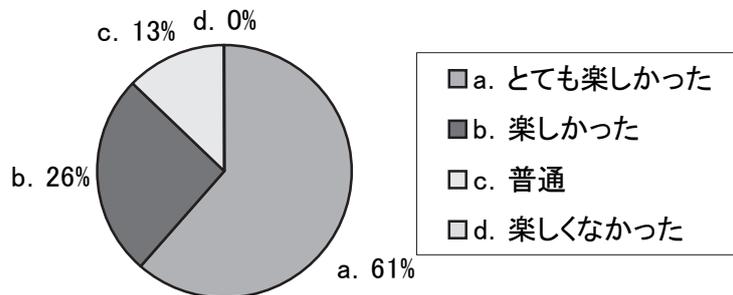
⑦町ぐるみ博物館に来られた回数



### ⑧次回も町ぐるみ博物館に来たいか



### ⑨もめん博物館の感想



## アンケート結果について

- ・12歳以下と41歳以上の参加者が多い  
「もめん博物館」は子供をターゲットとしていたため、課題はクリアしていると言える。今後「町ぐるみ博物館」を継ぐ世代となる10代後半・20代の参加者が少ないということに対する解決策等を考えていく必要があるだろう。
- ・平野区民の参加者が多い  
平野の町づくりを考える会によると「区民はほとんど参加しない」とのことだったため、今回は偶然、区民の参加が多かっただけかもしれない。  
また全興寺境内でのアンケートの数が多かったため、商店街に来た地元の人が多かった可能性もある。いずれにせよ、継続的にアンケートを採らないと分からないだろう。

- ・「町ぐるみ博物館」は他市・他県でも有名  
テレビや雑誌、図書館の本に取り上げられている。そのようなメディアを情報源とした参加者も多い。観光地化を目指していない「町ぐるみ博物館」にとってこの結果をどう捉えるかが注目される。
- ・「町ぐるみ博物館」各館の人気はほぼ均等  
好みの多様化によるものか。また、すべての項目に丸をつけている回答者も多かった。
- ・参加回数は「初めて」が約50%、「10回以上」が約30%を占める  
リピーターが多く、新しい客層も開拓されているようだ。今後、参加者は更に増加する可能性が高い。
- ・「もめん博物館」は成功  
楽しかった、または、とても楽しかったと答えた方が大多数を占めた。

## 「町ぐるみ」の温かさ

P.D. 櫻木 潤

私にとって、平野は懐かしい土地である。母方の祖父が平野出身であり、伯父が住んでいたこともあり、小さい頃には、祖父に連れられて、よく大念仏寺にお参りに行ったりしていた。しかし、ここしばらく平野からは足が遠ざかっていた。

2006年秋の文化遺産学フォーラムで、全興寺の川口良仁住職から、平野で「町ぐるみ博物館」という取り組みをしておられることをお聞きした時、一度、平野を訪れてみたいと感じていた。今回、地域連携企画「もめん博物館 in 平野」として参加させていただくこととなり、その思いが実現できた。



町あるきの疲れを癒す亀の饅頭

もめん博物館に携わるかたわら、平野の町を歩き、小さい頃には見出せなかった町の魅力を感じた。まず、平野の地が坂上田村麻呂の子、廣野麻呂ゆかりの地であるということ。廣野麻呂の墓所や邸宅跡、田村麻呂の娘で桓武天皇の妃春子の墓所が、今も平野の人びとによって守られていた。おもしろ庵のご主人によると、今でも廣野麻呂の命日には、七名家の方がたが参拝されるとのことである。

次に、センターとの不思議な縁である。関西大学博物館には本山コレクション金石文拓本が所蔵され、目下、センターで調査・研究



ご主人の熱い思いをお聞きしたおもしろ庵

中である。その拓本の中に、春子の開基と伝えられる長宝尼寺（平野本町）の梵鐘銘文がある。今回、長宝尼寺を訪れ、実物を拝見することができた。そして、なによりも魅力的であったのは、平野の人たちの温かさである。町歩きの途中、亀の饅頭屋さんやおもしろ庵に立ち寄ったり、商店街を歩くなかで、みなさんが気さくに声をかけてくださり、それぞれの平野への思いを聞かせてくださった。昼食には、祖父がよく連れて行ってくれた食堂を久しぶりに訪れた。残念ながら当時の店構えとは全く異なっていたが、当時のことをいろいろとお話しくくださり、店構えは変わっても、味は守り続けていると語ってくださった。また、おもしろ庵のご主人に、これまでの平野の方がたの取り組みについて、写真や本を取り出して熱く語っていただいことは、印象に残る一コマである（ご主人には関大関係者であることを明かしていないにも関わらずである）。

フォーラムでの川口住職のお話からは、「町ぐるみ博物館」へのプライドが感じられた。今回の地域連携企画では、多くの方がたとお話しする機会を得たが、「平野 町ぐるみ博物館」は、平野の文化遺産を守り、受け継いだこられた平野の方がたのプライドの結晶であるとともに、「町ぐるみ」の温かさなのではないだろうかと感じながら、平野の魅力をあらためて知った地域連携企画となった。

## 町と人が近い町・平野

P.D. 森本 幾子

今回の地域連携企画で、住職川口氏のご協力のもと、境内の一番良い位置を貸していただけになったのは、とてもありがたいことであった。生活文化遺産研究プロジェクト R.A. とインターンシップ生が中心となって綿くりや糸紡ぎをし、多くの子供たちが親子で参加しており、開催主旨としては成功したと思う。



全興寺前で売られていた平野こんにゃく

一方、まちぐるみ博物館参加者のアンケートでは、思いのほか、多くの人の意見をもらうことができた。しかし、地域の商店が博物館となっているので、アンケートをおこなう際に、買物客の邪魔にならないようにすることが大きな問題となった。

以下、平野のまちを歩いた感想を述べたい。全国には、「重要伝統的建造物群保存地区」(重伝建)に指定されている町並みがあるが、なかには、そこに「住んでいる」人の息吹がなかなか感じられない町もある。そして、来訪者と建造物の間に一定の距離がある。それにくらべると、大阪市平野は、そこに人々が住んでおり、商品の売買をしたり、道をたずねたりすることによって、町と来訪者との距離が非常に近い。それは、中世から近世にかけて「都市」として発展していた平野ならではの歴史的景観なのかもしれない。

平野は環濠がめぐらされ、生活空間として一定のまとまりをもっていた。そこには、住人の自治的な雰囲気生まれるであろうし、公園内の神社に残る近世の油業者奉納の玉垣からは、産業で潤ったかつての平野郷の繁栄がしのばれる。

当日、私は、大阪の現在の産業として有名な「トンボ玉」の店に入り、店の人に教えてもらいながら、桃色地と白地にマーブル模様のトンボ玉づくりを楽しんでいた。古いものと新しいものがうまく共存している町だなと感じるひと時であった。

2007年5月13日のワークショップで天王寺区を歩いたときにも感じたが、商業地域として発展してきたためか、大阪には、全国のどこの町並みとも異なる独特の都市景観が残されている。

近年、近世の都市史研究では、都市に居住するさまざまな職業の人たちについて研究が深まっているが、近代以降の過程において、都市空間がどのような歴史的条件のもとに残されるのか、あるいは変容するのかについても考えてみたい。



街角で見かけたレトロな看板

## 平野 町ぐるみ博物館の 周縁をめぐる

R.A. 内田吉哉

このたび、「平野 町ぐるみ博物館」に参加させていただくにあたり、まず最初に地下鉄・平野駅から全興寺まで向かう道すがら、平野が昔ながらの町の雰囲気をよく残していることを感じた。



平野郷東側の土塁跡

私たち研究員には事前に「平野 町ぐるみ博物館ガイドマップ」が配付されていたが、そのガイドマップで旧平野郷の痕跡が今でも残されていることを知り、ガイドマップを頼りに旧平野郷の外周を回ってみることにした。

旧平野郷の東辺にあたる、平野公園付近では、平野区外から来たとおぼしき人達が多く見られ、旧平野郷の環濠跡や「安藤正次の墓所」を見学していた。平野公園から、環濠跡



杭全神社の鳥居

に沿って配置される地蔵尊をすべてめぐるように歩いてまわったが、旧平野郷の外周の北半分は、平野公園付近と同様に、平野区外から来訪したらしき観光客が、史跡巡りをする姿がみられた。

こうした、旧平野郷の外縁部で目にすることができる光景と対照的に、平野郷中心部にあたる全興寺付近に戻ると、地域住民が多いように感じられた。全興寺では、境内で紙芝居の催しや「小さな駄菓子屋さん博物館」などがあるために、日頃から地域の子供の遊び場所になっているのであろうが、「平野 町ぐるみ博物館」は、地域の子供の交流の場となっている印象を受けた。



全興寺で行われていた紙芝居

「平野 町ぐるみ博物館ガイドマップ」を見ながら、旧平野郷外縁部の地蔵尊をめぐり、昼食や休憩のために全興寺に戻る際に各博物館をまわるという行動の中で、楽しく感じた点と苦勞した点とを以下に挙げてみたい。

最初に旧平野郷の痕跡に興味を抱いたきっかけとして述べたように、「平野 町ぐるみ博物館ガイドマップ」は見所がわかりやすく説明されており、平野の町を楽しむ上で大変有用であると感じた。ガイドマップを見ながらの名所探訪は、オリエンテーリング的な楽しみもあり、旧平野郷の町内をほぼくまなく踏破することができた。

ただし、旧平野郷外縁部の探訪と博物館の見学との両立が難しく、一つには博物館を探



新聞屋さん博物館に隣接する小林新聞舗旧店舗

し出すことに時間がかかり、もう一つには旧平野郷外縁部をめぐるルートから脇道にそれる形で博物館を目指さねばならないため、歩行距離が増えてしまうという苦勞があった。おそらく、旧平野郷外縁部を歩く史跡見学者の中には、博物館の存在に気づきにくいケースもあるのではないかと推測される。

試案として、平野の町を歩くコースを設定してガイドマップに記す、また町中に「○○博物館まで○メートル」などの案内看板を掲示する、などの準備があれば、観光客の利便性にもつながり、「平野 町ぐるみ博物館」開催者側としても意図した方向へ人を集めることができるのではないかと感じた。

#### 町ぐるみ博物館体験記4

## 平野 町ぐるみ博物館体験記

R.A. 内海寧子

平野 町ぐるみ博物館は「まち全体が博物館」だということを聞き、どんな面白いものに出会えるのかと、ワクワクして見学会に参加しました。私にとって博物館といえば、新しい発見や驚きが得られ、知的好奇心が満たされる場所だからです。

#### ■まずは、古跡名所見物

マップをいただき、面白そうな博物館がたくさんあることがわかったのですが、初めに自分の研究関心から、大坂夏の陣で落命した徳川方の武将・安藤正次のお墓見学に行きました。江戸時代中後期には、大坂の陣戦士の墓を訪れる武士がおり、このお墓も江戸時代から続く名所であったといえます。墓地には、大峰山の役行者の墓や碑もあり、きれいに整備されていました。



町の風景

ここは旧環濠の東端で、近くの赤留比命亮神社には、環濠と堀の名残がみられました。ちょうど、堺市から来た歴史愛好グループのご婦人方と一緒にになり、環濠について教えていただきました。平野の歴史をよく調べた上で現地見学に臨んでおられ、関心の高さがうかがえました。

#### ■路地にひきよせられて

まちめぐりをするなかで、次第に平野のま

ちなみの魅力に惹かれていきました。観光地のように「創られた」ものではなく、お昼時には、家庭から昼食の支度をする音が聞こえるといった地域の日常の生活感・雰囲気を感じられます。また、住宅と商店が混在するなかでの、路地探索は楽しいものでした。ふと路地を曲がると趣のある商店があり、自分のお気に入りを発掘するような気分になってきます。博物館を開いていないお店の方々も、気軽に声をかけてくださいました。地域の方と会話を交わすなかで、普段着気分で平野の街になじんでゆくような気がしました。街道の交差点ゆえに道標も多く、現在の生活と歴史が一緒に空間に見られるという点も魅力的でした。

### ■平野の子どもと博物館

28日は不動明王の縁日と日曜日ということもあり、全興寺には多くのお参りがありました。近隣の子どもたちも、紙芝居や境内での遊びを目当てに、たくさん集まっていました。みんな、ここにくれば面白いことがあるのを知っているようです。子どもたちはご住職とも顔見知りで、気軽に話しかけていました。境内は、老若男女が集まる交流の場となっていました。このような環境で育っていく平野の子どもたちをうらやましく感じました。



地獄堂で泣きべそをかきながら「もう悪いことをしない」と誓う子ども

### ■心残り

マップで見る限りでは「たくさん博物館がある街」という印象でしたが、実際に体験し、



日常の音が聞こえてくる博物館

《聞き方》左の数字と上の数字の組み合わせでトラック番号を選んでください。 例：1 (タイトル) 27 (あそび場) 82 (曲)					
1	2	3	4	5	6
平野の印象 (1)	神野屋さんの音 (1)	長崎 (2)	神野屋さんの音 (2)	平野中学校の橋のナギイム (2)	平野の印象 (2)
平野の印象 (3)	国道22号線 (3)	国道22号線 (2)	国道から路地へ入ると	トラックがパツパツする音 (4)	平野の印象 (4)
平野の印象 (5)	ペントショップで売られていた魚	あそび場	寺の足音	現代の足音	平野の印象 (6)
だんじり - 東国屋	夏祭だんじり 花入 - 東国屋 観る	夏祭だんじり 花入 - まいまい	夏祭だんじり 花入 - 一本掛	夏祭だんじり 花入 - 鳥居の奥	勝手に通り上がるだんじり少女達
平野の印象 (7)	机の上でだんじり囃子を練習する音	神うつけ	夏祭の大工仕事	だんじりの飾りつけ	机の上でだんじり囃子を練習する音
1	音が鮮やかで聴く	子どもだんじり	平野の印象 (8)	綿の音ってどんなでした?	下水
商店街の音	商店街のB.G	スーパーマー	お花屋さんの	おひきやさん	

「町ぐるみ博物館」というのは、街そのものに新しい発見と出会いがある博物館なのだと気がつきました。

一般的な博物館や美術館は、少しお洒落をして見学するイメージがありますが、平野の場合は、普段着で、しかも、おいしいものを食べながら見学できる、五感で味わう博物館です。おいしそうなものを見つけては、帰り際にまた来て買おうと決めていたのですが、残念ながら味わいきれませんでした。それが心残りですが、今回の心残りは次の訪問のきっかけになりそうです。

## パズル茶屋 おもろ庵

R.A. 千葉太朗

今回、センターから平野 町ぐるみ博物館にもめん博物館を開館するという形で参加することになりました。私自身も町ぐるみ博物館への参加は初めてのことでした。昼からもめん博物館で染色体験の担当になっていたの、午前中に博物館めぐりをすることにしました。

事前にどんな博物館があるか調べていて、私が特に興味を持ったのが、「パズル茶屋 おもろ庵」でした。もともとパズルの類は好きだったので、ここはぜひ行ってみようと心に決めていました。



パズル茶屋・おもろ庵

もめん博物館の開館準備が終わり、博物館めぐりをすることにしました。昼までの限られた時間しかないので、パズル茶屋へ直行しました。店内は雰囲気の良い、ちょっと和風な感じでした。とりあえずコーヒーを注文し、店主に声をかけてみました。

「あの一、何かおもしろいパズルはありますか。」すると

「これ、お客さんが作ったパズルだけど、なかなか難しいですよ。私もまだ解いていないんですよ。」

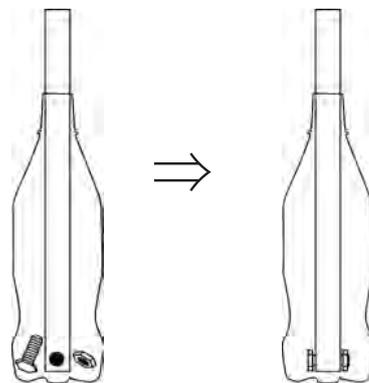
と言って、出してくださったのが、図のようなパズルです。ペットボトルの口よりやや細い棒の先端に孔が開いており、その孔に

ボルトを通し、ナットを止めるというものです。数々のパズルをこなしてきた店主もまだ解いていないパズルということで、なんとしても解いてやると、俄然やる気が湧いてきました。しかし、意気込んで望んだものの、どうにもこうにもいきませんでした。すると店主が

「このペットボトル、腰がくびれてるでしょ。これがみそらしいですよ。このコココーラのペットボトルのような形じゃないとだめらしいですよ。」

というヒントをくれました。なるほど、このくびれを利用するのか……。とはいうものの、まだボルトを孔に通すことすらできていません。ああでもない、こうでもない、そうこうしているうちに、ようやく孔にボルトが通りました。あとはナットを止めるだけ。どうすれば・・・「腰がくびれてるでしょ。これがみそらしいですよ」……。なるほど。このヒントのおかげでなんとか昼までに解くことができました。この他にも、2つほど知恵の輪を出してくださったのですが、こちらは手も足も出ず、タイムオーバーになってしまいました。パズル茶屋は、ついつい時間を忘れてしまうくらい楽しいところでした。

パズル茶屋以外の博物館をめぐることができませんでしたが、このような誰でも気軽に楽しめる博物館こそ、本来の博物館のあるべき姿なのだと感じました。今度はいろいろな博物館をめぐりたいと思います。



ペットボトルのパズル

## 町ぐるみ博物館体験記6 平野の町を歩いて

R.A. 松永友和

私たちが平野の町を歩いた10月28日は秋晴れとなり、町歩きには絶好のコンディションとなった。全興寺から出発して最初に向かったのは、杭全神社の「鎮守の森博物館」だ。その途中の亀の饅頭屋さんで、亀の形をかたどった亀饅頭を購入。国道25号線を横断し、日本最初の民間学問所「含翠堂」跡碑をカメラにおさめる。含翠堂といえば、元関西大学教授津田秀夫先生の著書『近世民衆教育運動の展開—含翠堂にみる郷学思想の本質—』（御茶の水書房、1978年）がある。戦後、津田先生たちがいち早く史料調査・研究を行ったのが平野であり、含翠堂である。大坂の学問所として有名な懐徳堂が設立される7年前の享保2年、土橋友直が含翠堂を、この場所で設立したと思うと感慨深い。



含翠堂跡の碑文

含翠堂をあとにして国道25号線を北西に進むと、杭全神社の石鳥居がある。鳥居をくぐり参道を進むと、やや苔むした石碑が私の目にとまった。石碑は明治期に建立されたもので、「蒼湖山口先生報徳碑」とある。もう少し詳しく見ると、「南岳藤澤恒撰」とある。大阪の漢学者で、泊園二代院主として知られる藤澤南岳撰の石碑に出会うとは思ってもみなかった。町歩きの醍醐味は、このような「発

見」にあることを実感した。



藤澤南岳撰 蒼湖山口先生報徳碑

さらに参道を進むと、左側に大きなクスが目にとび込んでくる。その巨大さに圧倒される。幹周は約10m、樹高は約20m。現在、大阪府の天然記念物に指定されている。樹齢はなんと800年という。「平野の町づくりを考える会」発行のガイドマップには、「樹齢800年の大楠や、神聖な場所として大切に守られた鎮守の森は生きた博物館である」との説明がある。たしかに、このクスの木以外にも、境内社の稲荷社前には、樹齢700年のイチョウの木もある（大阪市保存樹）。杭全神社には多くの木々が生き茂り、その様子は航空写真からもよくわかる。巨樹のクスやイチョウなどは、根元部分は大きく根を地面に張り、数百年という長い歳月をここで過ごし、現在も生命を未来に繋いでいる。なるほど、杭全神社全体が「生きた博物館」と呼ば



杭全神社境内

れるゆえんである。

杭全神社で参拝した後は、坂上公園にある「坂上広野磨墓所」や、満願寺にある「坂上春子妃墓所」を探訪。平野の歴史が古代から脈々と続いていることを確認する。

昼食を済ませた後、再びフィールドワークへ。今度は、融通念仏の総本山大念佛寺に向け出発。その途中、長宝寺の鐘銘や坂上広野磨屋敷跡を見る。大念佛寺では8月第4日曜日に「幽霊博物館」が開催されており、数々の幽霊の掛軸があるという。今回は見る事ができなかったため、それは来年の楽しみにしようと思う。



古河藩陣屋跡石碑

また大念佛寺の南門は、元古河藩陣屋門であり、数少ない陣屋の遺構の一つである。そのあと、さらに国道25号線を南東に進み、平野小学校前の「古河藩陣屋跡」碑を写真に撮る。幕末の古河藩主で、雪の結晶を顕微鏡で観察した人物として知られる土井利位や家老の鷹見泉石が、この地で陣屋を構えていたのである。

今回町歩きをして感じたのは、「平野は歴史の面影を色濃く残す町である」ということである。大阪では新しいものがどんどん建てられるが、平野には古い町並みが残されており、在りし日の大坂の横顔を平野は感じさせてくれる。

町ぐるみ博物館体験記7

## 平野 町ぐるみ博物館を体験して

R.A. 松本望

### ●桜の有用性

和菓子屋さん博物館こと「平野郷果 梅月堂」では、お店に代々受け継がれてきた和菓子の木型や焼印、型紙、和菓子のデザイン画が展示されていました。店主の方から和菓子の道具についてお話を聞き、中でも和菓子の木型の素材が桜であることが興味を引きました。というのは、私は江戸時代の和本や人びとの読書について研究しているのですが、和本を印刷するのに使う板木の素材が桜（ヤマザクラ）であったことを思い出し、桜の有用性について改めて考えたからです。

板木にも使用される桜という素材は、彫刻に適していて、ひずみが少ないことが特徴です。桜で作られた板木は200年もつとされています。



和菓子の木型

和菓子の木型を彫刻するに際してはその造型をより繊細に表現できること、また木型の使用に際しては、日々の使用に耐え、長持ちすること、これらのことを考え合わせると、和菓子の木型にはやはり桜が適しているのかなあと思い到りました。そして、江戸時代から明治時代にかけて、桜は様々な場面で使われる、とても便利な素材だったのかもしれないと思いました。

## ●平野珈琲と子どもの遊び文化

昼食かたがた訪れた珈琲屋さん博物館には、150～100年に作られたコーヒーミルやカップ&ソーサーが展示されており、毎週日曜日には、平野珈琲やトルコ珈琲といった限定メニューが登場します。私は限定メニューのうち、平野珈琲をいただきました。

平野珈琲は、明治時代に鹿鳴館で皇族貴族たちに飲まれていたであろうコーヒーを現代平野風アレンジしたという謳い文句で出されています。



平野珈琲

お店の女性の話によると、コーヒーを初めて飲んだのが豊臣秀吉と伝えられており、高野山に向かうときの第一の宿場であった平野に、比較的早くコーヒーが伝わったそうです。町ぐるみ博物館に出展するにあたって当時のコーヒーを再現して出そうと決めたそうですが、商品化する過程はとても大変だったようです。

コーヒーの歴史について書かれた文献資料をもとに、明治時代に飲まれていたであろうコーヒーを再現してみたら、とても渋かったとのこと。豆のブレンドや挽き方、抽出方法など試行錯誤を繰り返し、現代の人びとにも飲みやすいよう改良を重ねたそうです。

趣のある器に注がれた平野珈琲は、すっきりとした飲み口でとてもおいしかったです。逆に文献のとおりで作った渋いコーヒーを飲

んでみたいと思いました。

平野珈琲を飲みながらお店の女性と話していると、子どもの遊びの話に及びました。彼女は「ひらの町づくりを考える会 おんな組」の活動に参加し、お手玉やおはじき、ゴムとび、鞠つきなどの遊びや遊び歌といった、子どもたちの遊びの文化を伝える活動をしていること、全興寺の境内が子どもたちの遊び場として機能するために、地域の大人たちがボランティアで積極的にかかわっていることなどをお聞きしました。

私の子ども時代と比べたとき今の時代は、子どもの遊び文化を大人たちが「努力」しないと後世に伝えていけない時代であること、大人たちが「努力」して子どもたちの遊び場を守らなければならない時代であるように感じました。

珈琲屋さん博物館を出て全興寺の境内に戻ってきたとき、ちょうど紙芝居をやっている最中でした。川口さんが出すクイズに、先を争って「ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！」と大きな声を出しながら手を挙げている子どもたちを見て、現代の子どもたちに対して言われている、疲れている、冷めているなどといったイメージとはかけ離れているように感じました。

また全興寺に集まってきている子どもたちは別々の小学校に通っており、全興寺で友達関係を築いていると聞きました。私は自分が所属するコミュニティとは違うコミュニティで人間関係を形成できる人間は強いと考えています。

「まちが子どもたちを育てている」。このことを強く感じました。

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み 1

### パズル茶屋

2006年8月から「パズル茶屋」として参加されている「おもろ庵」の店主、黒田さんにお話を聞かせていただいた。



パズル茶屋の外壁に展示されているパズル

「おもろ庵」の名前は、全興寺の隣に位置し、「町並み修景事業」の一環として改築された長屋が並ぶ「おもろ路地」に由来する。一方「パズル茶屋」の方は、寺の門前茶屋の意味が含まれている。古い長屋を改築した外観とは反対に2005年7月に開店した「町ぐるみ博物館」に出展しているお店の中では比較的新しい方である。これまでサラリーマンをされていた黒田さんは、飲食店を開くにあたり、百貨店のレストラン部門に所属していたくらい経験や知識しかなかった。そのため、経営で苦労された点も少なくはなかったようだ。しかし、開店から3年間変わらぬメニューと茶粥などを扱う和風スタイルは、大勢のお客さんからメニューの増加やモーニング・ランチの追加、または営業時間の延長という声があるほど支持され続けている。ほかにも「おもろ庵」自体はホームページを作っていないにも関わらず、お店を訪れたお客さんがブログなどで紹介しているため、インターネットで検索すると必ず何件かヒットするという。

そしてこのお店の人気の秘訣は、名前のおりお店の至る所に置かれたパズルにあるだろう。もともとパズルの収集が趣味であった

黒田さんが、初めてお店を訪れるお客さんの気まずさの解消や、一人客へのサービスとして置いたのが始まりである。それ以来、パズルは、お客さんとお店の人、そして会ったばかりのお客さん同士を繋ぐコミュニケーションツールの役割を果たしている。2006年の時点では80、更に2007年には150種類ものパズルがお店に溢れ、たくさんのコミュニケーションを生み出すきっかけとなった。このように、「おもろ庵」は一種のコミュニケーションスペースとなっている。「実際、お客さんのコミュニケーションやパズル茶屋の取り組みには、お客さんに協力してもらっている点が多い。手作りのパズルをもらったり、パズル愛好家の人よりも、家族連れがゲーム世代の子供と一緒に知恵の輪をしてくれると嬉しく思う。」と黒田さんは語る。さらに、博物館としては、店の正面に設置された展示ケースにもパズルを展示している。町ぐるみ



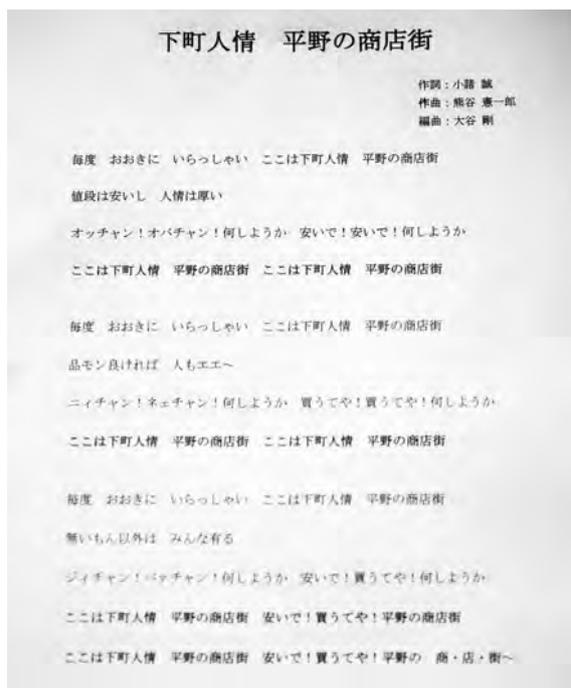
パズルの詰まった棚

博物館の日には店内が満席になってしまう。そこで、中に入れなかったお客さんにも楽しんでもらう事ができるようにという黒田さんの気配りから生まれた工夫である。

また、「パズル茶屋」についての話だけでなく、「町ぐるみ博物館」の始まりや、全体としての取り組みについても話して下さった。「町ぐるみ博物館」の前身「町づくりを考える会」は今から27年前、駅舎存続運動を機に結成されたものだ。「町並み修景事業」として市から外観補修の費用を出してもらえ

る事はありがたいが、他方で、「町ぐるみ博物館」に参加している多くの方が共有するコンセプトとして「町の有志が、行政の介入なく、おもしろいことをする。自分たちがまず楽しみ、プラスアルファとしてお客さんに楽しんでもらう」ことが挙げられる。黒田さん個人としては、「あそび心の町づくり」をテーマに、同じように古い町並みであっても、平野を京都や奈良のような観光地にするのではなく、人情味や昔住んでいたような懐かしさのある町として残したいと望んでいる。また、他地域の人からの実際そのような町であるという声も多々耳にするそうだ。最近、メディアへの露出も増え、特に8月のスペシャルデーには他府県からの団体が多く訪れる。町の中に案内用の看板を作ったが、それでも、駅近くに看板を作らないのは、地元の人いろいろ尋ね、コミュニケーションをはかってほしいという思いからである。

他にも、「小諸誠」の名前で平野の歌の作詞を手掛け、全興寺や商店街でライブを行ったり、平野限定グッズを作ったりと、平野という自分たちの町の温かさを大切にしていることが伝わってきた。



小諸誠さん作詞の「下町人情 平野の商店街」

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み2 平野映像資料館

呉服・悉皆屋「染と織・まつや」店主・松村長二郎さんが館長をつとめるのは、平野映像資料館。町ぐるみ博物館には開始当初から参加されている。町ぐるみ博物館を主催する「平野の町づくりを考える会」は廃線になる南海電車の駅舎の保存運動から始まったが、力およばず駅舎がなくなる事になったとき、会で駅の葬式を行なった。それが翌日の新聞に「平野は遊び心を持っている」という風に取り上げられ、そういう「面白いこと」を「次何やんねん、次何やんねん、とやっていたら、こうなってしまった」のだそうだ。



平野映像資料館外観

館で保管している映像は、松村さんが撮られたもののほか、ご先祖が撮られたという80年前の映像も。通常は平野の1年間の行事をエンドレスで流しているが、リクエストに応じて、祭りや御田植神事や町ぐるみ博物館の過去の行事など、色々な映像も見せる。昔のフィルムをビデオに変換する作業（テレシネ）もされているが、お客さんの中にはフィルムで見たいという方も居られるという。

町ぐるみ博物館の日はたくさんの方が来られ、お昼ご飯を食べられたことがないそうだ。テレビや雑誌の取材も多く、それで有名になってから、環濠に興味がある人、博物館に興味がある人、町並みに興味のある人など色々な目的を持った人が増えてきた。色んな人が

来るので、今日は誰がどこから来るのかなという楽しみがあり、また好感を持って帰ってもらえるようにと思うようになったという。



8ミリビデオカメラ

松村さんが昔実際に使っておられた古い映写機、撮影機をいくつも置いておられ、見せていただいた。昔のものは頑丈なので、今でも使おうと思えば使えるとのこと。他に見せていただいたのは日本で此処にしか残っていないという活動幻灯機。今から75年位前、商業映画も白黒でサイレンスだった頃に、カラーで音が出るという画期的な映写機だった。幻灯機にセットされている紙製のフィルムは、アニメのコマフィルムのようなもので、1秒4コマ。松村さんと映像との関わりの原点でもある。その後、松村さんがフィルムで映像を取り始めたのは55年前からだが、撮ったフィルムはたまりにたまって総延長は10.5kmになった。見るのに4日くらいかかるのだとか。撮影機も、時代と共にフィルムからアナログビデオ、デジタルビデオと変化している。またビデオの映像をDVDに変換したり、デジカメの映像を動画に編集したりとデジタル機器にも精通されており、私はとてもその知識と用語についていけず、その技術力には感嘆するしかなかった。

平野地区では、地元住民と大阪市が連携して域の特色を生かした住宅や住宅地づくりを行なう「HOPEゾーン事業」も行なっているが、松村さんは事業を推進するために設立された平野郷 HOPE ゾーン協議会の会長もつ

とめている。平野では住民自身が自分たちでやっという意識が非常に強く、この会も住民主体。松村さんは「信長の時代から上の言うことを聞かないというDNAがある」と仰ったが、それだけではない何かの力を感じた。その最たるものが平成19年3月16日に公布・施行された「平野郷地区地区計画の区域内における建築物の制限に関する条例」だ。これは、町並み保存の活動を長年してきているにも関わらず、平成18年に地区内に12階建てのビルが建ってしまったことがきっかけ。今後そういうことがないように、地区内の建築物の高さを22m（大念佛寺の本堂の高さ）に制限する市条例を作ったのだ。条例の制定には様々な要因があるため、普通は2年半くらいかかると言われたのを、協議会は半年で都市計画法による「地区計画」の試案としてまとめた。そして2月に大阪市都市計画審議会で可決、3月には議会で可決され、施行された。しかも約80haという広い区域で指定するのは全国はじめてで、大阪市はびっくりしていたという。



町ぐるみ博物館当日の展示物

地区全体のことを考え、町ぐるみ博物館だけでなく精力的な活動をされている松村さん。新しい技術を取り入れ、いずれハイビジョンに移行したいと仰りながらも、デジタルではないフィルムの持つ力とやわらかさについて話す姿は非常に楽しそうに見えた。松村さんはこれからも「おもしろいこと」をやり続けてくれるだろう。

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み3 自転車屋さん博物館



自転車屋さん博物館外観

初めて自転車に乗った日のことを覚えているだろうか。私はもうはっきりと思い出せないが、おそらく姉のお下がりの、小さな子供用自転車だったように思う。そして、自分の自転車を買ってもらったことは今でも鮮明に覚えている。小学校1年生から6年生まで乗り続けたその自転車は5段変速機をついた20インチ車で、ライトがリトラクタブル（開閉式）になっているのが自慢だった。

自転車屋さん博物館は「スポーツ車の店田川」の田川今朝七郎さんが、店舗で運営する博物館で、開館日は店の定休日の水曜・木曜を除く毎日。時間も営業時間と同じ、午前9時から午後6時までとなっている。この博物館がオープンしたのは町ぐるみ博物館が始まってから2年後のことだということだったので、平成7年ごろになる。



メーターやライトのコレクション

ここで展示されているものの中には、子供のころに見たことのあるものや、実際に使っていたことのあるものもおかれていて、とても懐かしい。店の奥のほうには古いスピードメーターやライト、反射板などが数多く置かれている。おそらくヨーロッパ製であろうスピードメーターなどは小ぶりのデザインでとてもオシャレな印象を受ける。

また、店の天井から吊り下げられた自転車の多くは、田川さんがフレームから手がけたオリジナル自転車で、「f（フォルテ）」のロゴマークが入っている。今はもうめったに作ることはないというオリジナル自転車だが、細かなパーツまで手作りされていて、そのこだわりは半端ではない。「カッコイイ」とか、「速そう」とかいうよりも、「乗ってみたい」という衝動を強く感じる、そんな仕上がりである。



田川オリジナル自転車

かわりだね自転車でも有名で、ギネスブックにも載っている世界最大の自転車は、高さ3.5m。普通の家なら2階の窓に届きそうな高さだ。ほかにも籐でできた自転車や、4人乗りのメリーゴーランドのような自転車、5つの輪でフレームが構成されたオリンピック自転車などもある。こういった自転車には、乗っていて楽しい自転車を作るという、田川さんの自転車に対する哲学が見て取れる。

そんな自転車屋博物館で田川さんにインタビューする中で、印象に残ったのは「時代が変わってしまった」という言葉だった。確か



籐製の自転車

にモノとしての自転車に対する価値観は変わってしまっている。少し前ではありえない安さで自転車が売られているせいか、使う側は整備をすることもなく、乗るだけ乗って、ダメになったらさっさと買い換えてしまう。チェーンに油を差すことすら、しない人のほうが圧倒的に多い。駅前に放置されたままの自転車は撤去された後、その多くが処分されてしまう。さらには、安易に盗んでいく人も後を絶たない。

自転車に乗ることの意味も変わってきている。昔はのんびり自転車を漕ぎながら風景を見て回ったりする人が多くいたが、今はそういう人がいなくなったと田川氏はいう。自転車がただの移動手段としての意味しかもたなくなり、自転車に乗ることそのものを楽しむ人が少なくなってしまったのだ。

自動車を運転できず、電車に乗るお金も持っていなかった子供のころ、自転車はもっと身近にあったはずだ。そして、そんな自転車にまつわる思い出を持っていないという人はそう多くはないのではないだろうか。この「自転車屋さん博物館」はそんな思い出話をしながら、家族で訪れてほしい博物館である。

#### 町ぐるみ博物館各館の取り組み 4

### 幽霊博物館

融通念仏宗総本山、大念佛寺。その山門から境内に入ると、ひととき大きな本堂（大阪府下最大の木造建築物、国の登録文化財）に圧倒される。その広い境内の一角で、年に1回、8月の町ぐるみ博物館の日だけ開館されるのが幽霊博物館だ。ここでは多数の幽霊画の掛け軸と、幽霊が残していったと言われる「亡女の片袖」「香合」が展示される。

幽霊博物館について話して下さったのは、中江慈光さん。もともと大念佛寺では町ぐるみ博物館がはじまる前から、8月末に境内で開催する「たそがれコンサート」の日に合わせて掛け軸の公開をしていた。「平野の町づくりを考える会」にも参加していたため、町ぐるみ博物館がスタートするときに、博物館として開館することにしたそうだ。



幽霊博物館開館時の混雑のようす

公開されている「亡女の片袖」はもともと寺の宝物だ。だが、実は掛け軸は宝物ではなく、40年位前にお寺に持ち込まれたもの。もとはおそらく屏風仕立てだったものを分解したようで、大正時代くらいの作だと思われる。寺の蔵で長い間眠っていたものを、面白いから見てもらおうということで展示したのが始まりだそうだ。

幽霊博物館は特に広報されているわけでもないのに、怪談の季節なことも手伝ってか、なんと来館者は1500人くらいで、長蛇の列

が出来ることもしばしばだ。暗い照明の中、効果音も入れており、泣いてしまう子どももいるのだとか。

35年前から大念佛寺につとめているという中江さんは、昔と今との違いについても話してくださった。

昔、寺や神社に行く人は、正月ならどこ、お彼岸ならどこ、と決めていたものだ。しかし、それが今は一度行ったらそれで終わりになっている。また、昔はお寺の境内というと子どもたちが野球をやったりして遊んでいたのが、今では全く来なくて、逆に寂しいのだそうだ。大念佛寺の付近の町会でも250世帯くらいあるが、小学生は一人か二人しかいないという。

平野の町も新しいものが建ち古いものが消え、変わってしまった。なくなってしまったから気づくのは遅いが、それでも気づいてくれるだけありがたいものだし、懐かしいと言ってHOPEゾーンに協力してくれる人もいる。大念佛寺では月に1回定例布教の会を行っているが、そのときの反応を見ると、このままではいけないと思っている人はだんだん増えていると中江さんは感じている。



大念佛寺本堂

中江さんが将来的にやりたいことは、やはり子どもの教育に関すること。2007年夏には、子どもを集めて田舎のお寺に連れて行くグループに協力したそうだ。最近は何かに感謝を表すために手を合わすことのできる子どもがいなくて感じている。それはその子ども



大念佛寺山門

に対する教育が原因ではないかと中江さんは言う。その遠因がおそらく高齢化社会や少子化社会なのだろう。兄弟がたくさんいればなんとなく学んでいけることを、一人っ子だと学べない。どこの子どもでも怒ってくる怖いおじさんも近所にいない。

そういう社会で必要なのは、選択肢を与えてあげることだと中江さんは言う。そのため町ぐるみ博物館で目的としているのは、幽霊の掛け軸を見せることでも宗派のPRでもなく、見に来た人たちがふれあえる場を作ること、本殿に上がってもらって少しでもゆったりとした雰囲気を感じてもらいたいことだそうだ。大念佛寺の境内に入って、あの大きな本殿に佇んでいると、確かに何かの力を感じた気がした。幽霊博物館を見学した際には、是非とも幽霊の掛け軸だけでなく、境内をゆっくり歩いてみてほしい。

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み5 新聞屋さん博物館



新聞屋さん博物館（左奥）と小林新聞舗旧店舗

平野中央本通商店街の中にある「新聞屋さん博物館」は月に1回、第4日曜日が開館日となっている。この博物館を運営する小林新聞舗は、大阪市内で最も早い明治22年（1889）創業の朝日新聞販売店としても知られ、国の登録文化財になっている旧店舗（昭和3年竣工）は特徴的なアーチ窓を持つ、大正ロマンを感じさせる建物である。旧店舗に併設する新聞屋さん博物館では明治時代の新聞や号外など、当時の出来事や情勢を知ることができる貴重な資料が数多く展示されている。展示されている資料は所蔵資料のごく一部で、総数は数千点というから、100年を超える歴史にはやはり重みがある。

今回取材に応じていただいた社長の小林治夫氏は、駅舎保存運動のころからの「平野の町づくりを考える会」のメンバーで、平野の啓蒙に力を注いでこられた。近年、テレビなどで「平野 町ぐるみ博物館」が取り上げられるようになったことで、地域の歴史を強く意識したり、それまで「普通の町」だと思っていた郷土を「いいところ」と感じて愛着を持ちはじめたりする人が増えたようで「（「平野 町ぐるみ博物館」は）成功しはじめています」とコメントされている。

博物館と銘打っている以上、博物館らしい設備や展示の充実化など、来る人の期待を裏

切らない、全体的なレベルアップが必要で、「平野のぬくもり」だけでは続いていかないと考えておられるようだ。シビアではあるが、客観的で冷静な目線ではないかと思う。ほかにも、観光化しすぎて町のよさを失わない範囲で、駐車場や公衆トイレを整備したり、案内センターを設置したりといったことを将来のビジョンとして語っていただけた。

また、小林新聞舗は「新聞屋さん博物館」としてだけでなく、販売店としても地域に密着したさまざまな活動を行なっている。たとえば新聞の読者サービスとして、平野郷の名所・旧跡をイラストマップにした「平野郷散策マップ」や平野の伝統行事に解説をつけたカードを集金時に無料配布している。また、発行部数1万部のミニコミ誌「だんじり新聞」を毎月発行し、平野で開催される行事や、平野の歴史など地域の情報を掲載している。さらには、古新聞を入れておく紙袋も、だんじりの絵が印刷されていて、独自のものとなっている。こういったことはもちろん、個人でできるものではない。

マスメディアとしての中立的な姿勢と視点を維持しながらも地元・平野に熱い視線を注ぎ続ける。そういう存在は極めて貴重ではないだろうか。「新聞屋さん博物館」はこれからも、平野の歴史をその冷静な目で見続けていくに違いない。



平野の伝統行事カード（表・裏）

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み6 くらしの博物館

弥生時代の墳丘墓「加美遺跡」で知られる加美の歴史は古く、神武天皇が遠征の祈り、馬を止めその鞍を修理させたとか、帰化人鞍部が次々と定住したなど、数々の歴史が伝えられている。また、平野郷は海外貿易で栄えた堺と同様に、中世の豪商たちの活躍する豊かな商業都市として栄えた。



くらしの博物館入口

この平野郷にほど近い鞍作村で、数百年間、百姓代や庄屋、村長など、村の要職を務めた家柄であった「辻元家」の屋敷をそのままの姿で使用しているものが、がんこ平野郷屋敷である。この屋敷は、重厚な門構えや広々とした奥座敷、土蔵の数々など、江戸時代当初の建築とされており、建てられてから三百数十年経っている。

また、屋敷内にある庭園も見事なものである。この庭は万博公園の日本庭園を手掛けた木戸雅光氏により、70種類ほどの樹木を自然仕立ての手法で雑木林をイメージして作られている。桜、つつじ、新緑、あじさい、紅葉と、四季の移ろいを五感で感じることができる。そして庭の中央には川が流れており、ここでは小鳥の水飲み場となり、約14種の野鳥を観測している。

屋敷の中を進むと、くらしの博物館がある。この「辻元家」が数百年にわたり日常に使用



庭園

し、集めてきた陶器備品や書画、骨董の数々を、現在もそのままの形で残っている5の蔵（米蔵・炭蔵・味噌蔵・内蔵・衣装蔵）のひとつ衣装蔵を改装し展示してあり、そこかしこに往時をしのぶことができる。

### \*くらしの博物館の主な展示品

- 掛軸 兆殿司作 飛鯉之図  
伊藤若沖作 水鳥 など
- 茶器 天目茶碗  
七宝の水差し  
茶釜（江戸時代初期）蒔絵の棗
- 茶軸 大徳寺の歴代館長の作品
- 器 南京赤絵皿  
南京小鉢  
青九谷百合絵皿
- 香炉 初期伊万里織部



七宝水差し

## 鎮守の森博物館

JR 平野駅を降り立って少し南東に進むと小中学校の横に広い緑の空間が広がっている。それが杭全神社と杭全神社公園で、杭全神社の境内全体が「鎮守の森博物館」だ。杭全神社は征夷大將軍・坂上田村麿の孫、当道が貞観四年（862）に氏神として素盞鳴尊を勧請し社殿を創建したのが最初と伝えられている神社。現在残っている3つの本殿は、それぞれ国の重要文化財に指定されている(註)。



杭全神社本殿

門から境内に入るとすぐ目に入る樹齢800年の大楠（大阪府指定天然記念物）をはじめ、大切に守られてきた神聖な空間全体が生きた博物館になっている。館長は、杭全神社宮司の藤江正謹さん。町ぐるみ博物館には平成5年のスタート時から参加されている。特に具体的な物の展示はしておられないが、日本で唯一現存しているという連歌所（大阪市指定文化財）を公開している。

神社敷地内の森・鎮守の森には30～40種類の木があり、また平安時代から各様式の建物が残っていて建築学的な見地からも魅力的だ。開館した当初は森の入口を開いて、お客さんに入ってもらっていた。しかし人間が如何に自然を壊す存在かということがわかり、わずか2ヶ月で閉めざるを得なくなった。それはゴミを捨てられるからということではなく、苔の庭であるために人が歩けば削

られ、また人間が入ることで乾燥してしまうからだ。普段から人を招き入れ慣れている庭はその状態で落ち着くが、招くことに慣れていない庭は痛むのだという。現在は年に1回、8月の開催日のみ開いている。

藤江さんはいずれは何か物も展示したいと考えている。具体例を伺うと、祭の道具は見せるわけにはいかないと断った上で、神社に残されている神社の縁起絵巻や御伽草子、御田植神事の装束やお面、また一般には使われなくなった火打石やほくちなどの道具、連歌の作品など、次々とお答えいただいた。ただし重要な文化財は本物を展示するわけにいかないことと、展示場所の問題などもあり、残念ながら実現には時間がかかりそうだ。

藤江さんは以前は観光客の多い鎌倉の鶴岡八幡宮におられたため、はじめは人を呼びたい気持ちは全くなく、むしろ静かな方がいいと思っていたという。「見る」ためだけに境内に入りお参りしない人々を見て「宗教と文化の接点というのは、なかなか難しい」と仰る藤江さんは、それでも町ぐるみ博物館が始まって以降、町の人たちの変化は感じておられるようだ。「こんなものを見に来るのだろうか？」とさえ思っていたのに意外と反響があったこと、そして町の外から人が来るようになって逆に町の人たちが自分たちの町を再認識しアイデンティティのようなものをかき立てられ、自分たちで自分たちの町を何とかしようという意識が生まれたという。



杭全神社拝殿

ところで、大阪教育大学附属平野小学校では平野ダッシュ村という取り組みを行なっていて、小学校で畑や水田を作っている。それを始めたのが藤江さんだ。お子さんが通っておられた約9年前に日本の原風景を見せたいという気持ちでやり始めたという。はじめは荒地で瓦礫だらけだった大阪教育大学の跡地には、いまや畑や水田、リンゴ園が広がり、町ぐるみ博物館の8月の博物・博芸スペシャルデイには特別展示館として参加している。



平野ダッシュ村

今後町ぐるみ博物館として取り組みたいのは、町の中に休憩施設とトイレを作ること。町には休憩施設が少ないため、境内に座り込む人がたくさんいたり、また特に花見の時期は神社のトイレが引っ張りだこになるそうだ。ただしトイレはその性格ゆえに設置する場所が難しく課題も多い。「皆が納得する設備をやりたいたいと思いますね」。

子どもたちに伝えたいこと、伝えなければならないことはたくさんあると仰る藤江さん。神社の行事が忙しく、なかなか新しいことははじめられないようだが、今この在る風景を守り続けるだけでも、意義があるだろう。

(註)

杭全神社本殿（第一殿）：元禄3年（1690年）建立。

旧春日大社本殿。一間社春日造、檜皮葺き。

杭全神社本殿（第二殿）：永正10年（1513年）建立。

三間社流造、檜皮葺き。

杭全神社本殿（第三殿）：永正10年（1513年）建立。

一間社春日造、檜皮葺き。

町ぐるみ博物館各館の取り組み8

## 小さな駄菓子屋さん博物館・平野の音博物館



全興寺本堂

小さな駄菓子屋さん博物館、音の博物館とともに野中山全興寺の境内内にある。館長は、全興寺住職でもある川口良仁さん。町ぐるみ博物館を主催する「平野の町づくりを考える会」の事務局も担当している。

「考える会」は、1983年に廃線になる南海平野線の駅舎の保存運動が設立のきっかけ。70年間お世話になった駅がなくなってしまう、そして住民と関係のないところで町が変わってしまうことに危機感を抱いて保存運動が始まった。結局廃線は決まってしまうのだが、その後も町づくりに関する活動を続け、平成5年に町ぐるみ博物館が立ち上がった。

全興寺境内内にある駄菓子屋さん博物館には、昭和20年代～30年代に駄菓子屋さん



小さな駄菓子屋さん博物館

に並んでいたおもちゃや、手絞りの電気洗濯機、木製の冷蔵庫、白黒テレビなどが展示されている。入口横には手打ちのパチンコ台も置いてあって、何度でも楽しめる。この駄菓子屋さん博物館は、川口さんがお寺の受付を作ろうと思ったのが最初。ところが受付というのは月に何回かしか使わないのもったいないことに気づき、川口さんが趣味にしていたおもちゃを展示しようと思ったのだそうだ。これを自分のところだけでやったらいけないからと他の人たちにも話を持ちかけて、なんと発案から3ヶ月で町ぐるみ博物館を立ち上げた。当初7館だった博物館は、現在は15館にまで増えている。



小さな駄菓子屋さん博物館館内

境内内にもうひとつある平野の音博物館は、CDに録音された懐かしい音、平野の年間行事、昔話などを聴くことができる。博物館という名称だがCD試聴用の機械だけであり、日本で一番小さい博物館だそうだ。聞くことの出来る音は、武庫川女子大学でサウンドスケープ(註)を専攻していた学生をプロジェクトリーダーにして、一年かけて録音したもの。面白いのは、神楽のお囃子やだんじりの音、昔走っていた電車の音、町の喧騒などの地域の特色が強く出ている音だけでなく、飛行機の音やATMの音などもあることだ。発される音自体はどこでも同じかもしれないが、平野の音と東京の音では空気も密度も違うから違うはずだ、というコンセプトで、平野の音として収録されているのだ。こ



平野の音博物館

のほかに「聞き耳処」として地域内の6箇所でCD音源またはFMラジオで聞くことができるサテライト博物館を展開している。

町ぐるみ博物館は、町に住んでいる人自身に、町の良さや残っている文化財、どんな人が住んでいてどんな趣味の人が居る、そういう自分の住んでいる町について知ってもらいたいという気持ちから始まった。現代は情報化社会と言われインターネットで何でも知ることができるが、人々は外にばかり関心が向いて自分たちの町についてあまりに関心がないように思う。それは、自分の生まれ育った町をよそと比較して、いいところではないと思いついでいるのではないだろうか。町ぐるみ博物館には外から多くのお客さんが訪れるが、観光地化はしておらず、駅などに案内板が立っているわけではない。その手法は、「観光」ではなく「感風」、つまり訪れる人たちに町の人々と触れ合ってもらいたいという思いがあるからだ。そして来訪者に聞かれた町の人たちは、わざわざよそから来るくらいだから平野はいい町なのかなあ、と思える。そういう二重のやり方が、目に見えない、数値化できないところで、町にいい作用を及ぼしているように思う。

川口さんが今後目標にしているのは多世代交流。全興寺の敷地の端っこにある「おも路



おも路地

地」では毎週末、子どもたちとその親御さんが年齢性別を超えて遊んでいるが、川口さんはそれを更に進めたものを考えている。「自分たちの町を楽しくするということは、老後も安心して住める町ということ」だという。そのためには地域の人々皆で支えあうことが必要だが、町全体がばらばらになってしまっている現代社会をもう一度一つにするには多世代交流が必要だということだ。ただし若い世代を引っ張るのはなかなか難しく、アートやコンサートなどのイベントをすると10代20代の人間もやってくるが、それは町づくりに直接的には結びつかない。現状ではうまく回っている町ぐるみ博物館だが、まだまだ課題は多い。

(註)

サウンドスケープ：soundscape。「サウンド」と、「～の眺め／景」を意味する接尾語「-scape」とを複合させた言葉。カナダの現代音楽作曲家・音楽教育家 R. マリー・シェーファー [R.Murray Schafer] が1960年代末に提唱したもの。日本語では「音の風景」と言われ、音の環境をあらゆる側面から総合的に見据える概念。

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み9 和菓子屋さん博物館

梅月堂の前田秀彦さんが和菓子屋さん博物館を出展するきっかけとなったのは、川口住職（全興寺）によるいきなりの誘いから始まった。はじめはこんな町の和菓子屋さんが博物館を出展するなんてと、照れがあり断ったという。しかし、川口住職から誘いを受けてから2年後、住職のもとへ和菓子作りの道具をすべて見せに行った。こんなもので博物館をしていけるのか自信がなかったが、住職から「十分です」との後押しの言葉をもらい、店内に道具の展示を始めた。来られるお客様に少しでも多く和菓子と触れ合えてもらえたらという気持ちからであった。



和菓子屋さん博物館外観

ここでは、主に和菓子作成に使われる木型が展示されている。十二支の干支の型や鯛の型などがあり、古いものは祖父の代から使われているものや最近に作ってもらったものなど様ざまである。道具の数ははっきりと数えたことはないが、およそ300点あり、定期的に展示品を入れ替えている。博物館をはじめた当初は恥ずかしかったそうだが、今ではこの博物館のことを自慢に思うという。

ちょうど町ぐるみ博物館に参加した頃から平野の名物・特産品を作ろうという話が上がり、太閤秀吉が飲んでいたといわれる平野酒の復元が行なわれた。前田さんはこの平野酒の酒かすを用いて酒まんじゅうの製作に着手



梅月堂店内

した。これには大変な苦勞があったという。初めは一口サイズで酒饅頭を作っていたが、何回も大きさが変わり、その度に生地的配合やこね方を変え現在の酒饅頭にたどり着いたそう。

特にこだわりを持っているのが酒饅頭の中身の餡である。おいしさを追求していき最終的にたどり着いたのが昔ながらの製法であった。一昔前までは鉄製の釜で小豆を炊いていたが、焦げやすく手間がかかり技術が必要となってくる。そのため現在では銅製の釜で炊くのが主流となっている。しかし、鉄製の釜で炊いた小豆は銅製のものと比べると断然に風味が良くなるので、前田さんは鉄製の釜を探すことから始めた。探していくうちに広島で鉄製のものを扱う工場を1軒見つけ特注で釜を作ってもらうことになり、今では鉄製の釜を使用している。一度焦がしてしまうと小豆は食べれなくなってしまい手間隙がかかるが、それだけ「うちの店ではこんだけのことをしてるんや」と、とても誇りに思っているそう。

前田さんはこれをきっかけに、酒饅頭が平野の名物として認知されてきた頃から、他の和菓子にももっとおいしいものをと追求していくようになった。もともと和菓子の起源は栗や干し柿などから始るとされており、前田さんはそこで和菓子を作る前の材料を加工する時点から考え直すことにした。使われる

材料の一番おいしい時期や場所を見極めてからその材料を用いて和菓子を作る。

それは花から実となり、そして一番おいしいときを経て、店に来て、和菓子として手を加えることでまた花を咲かすようなものである。綺麗なもの、かっこいいものは作ろうとは思っていない。ただひたすら純粋においしさを求めているそう。

このこだわりを貫くには大変な努力が必要となる。だがその分、自信につながるという。ある日、和菓子が嫌いという子どもと話す機会があった。理由を聞いてみると「餡が食べれない。」というものだった。そこで「おっちゃんこの和菓子食べてみ。」とその子どもに勧めてみることにした。初めは嫌がっていたその子は食べるなり「おいしい！」と言ってくれたそう。きっとこれは和菓子一つ一つに努力を惜しまず、“ほんまもん”を貫いているということが子どもにもしっかりと伝わった結果だったと思う。

これからも平野で生まれ、平野で育った前田さんは、これからもおいしいものを追求していきながら平野の町にちなんだ和菓子作りをしていくと、自信に満ち溢れていた。



干菓子の木型

## 町ぐるみ博物館各館の取り組み 10 町屋博物館・今野家

町屋博物館・今野家は、江戸時代後期に建てられた町屋を公開している。現在はそこには住んではおられないが、町ぐるみ博物館の開館日には館長である今野博さん本人が常駐し、来館者に案内をされている。



町屋博物館・今野家外観

今野家は、今野さんのご両親が亡くなった後、20年ほどはずっと空き家だったそうである。それを潰して建て替えるかガレージにするかしようと思っていたところ、平野映像資料館の松村さん（今野さんとは同級生でもある）に、「遊びでこういうこと（町ぐるみ博物館）をやってるんやけど、2・3ヶ月潰さずに置いておいて、参加してくれへんやろか」と言われて参加したのが、町ぐるみ博物館に参加したきっかけ。2・3ヶ月のはずが、それがいつの間にかもう10年になってしまった。町ぐるみ博物館取材した98年発行の雑誌に町屋博物館も掲載されているので、本当に10年経っている。それだけ長い間やり続けてこられた理由を聞くと、「遊びでやるからには楽しくないといけない」と仰った。

町屋博物館・今野家の展示品は今野家という町屋そのものと、ピンホールカメラ、そして鉱石ラジオ。ピンホールカメラで撮った写真や、昔の生活用品なども展示されている。鉱石ラジオは私たちも聞かせてもらったが、雑音もなく綺麗な音声でラジオを聞くことが

出来た。今野さんは昔からオーディオ関係に興味でされていたそうで、日本橋に行って部品を買ったり、自作したりしたそうである。以前に町ぐるみ博物館を100館開催したときには、今野家では従来の町屋博物館に加えて、ピンホールカメラ博物館と鉱石ラジオ博物館の3館を開館している。

今野家のつくりは、間口が狭く奥行きが深い長細い敷地に、当時としては何の変哲もない藁葺き屋根の民家である。入り口から奥に向かって土間があり、右手にはミヤ、ミヤの奥にはザシキと、中庭を隔てて離れザシキがある。そして裏にはイヨカンの木が立派な実をたくさん実らせていた。「特に何をやっているわけでもなく、資料を見せる場として、来館者に資料を見せている」というが、月1回とはいえ、家全体を展示し、お一人で案内をするのはさぞや大変だろうと思う。だが、今野さん本人は非常に楽しそうにされているようである。



鉱石ラジオ・ピンホールカメラなどの懐かしい品々

今野さんは、それまでは平野の町のことを全然知らなかったが、町ぐるみ博物館をきっかけに平野歴史民俗研究会を作って調べ始めたそうである。毎月一回7・8人で集まって、平野に関係する古文書を読んでおられるそうで、そこからまた新しい人との繋がりができたり、新しいことが分かったり、という付属物が出てくるのが楽しい、と言う。「（町ぐるみ博物館に）首を突っ込んだおかげで、いろいろさせてもらって、楽しくやっています」。

それでも困ったことくらいはあるだろうと聞いてみたのだが、「あまりないですねえ」。ただ、ここに住んでおられるわけではないので、その点で維持管理が少し大変とのこと。雨漏りなどの補修や、庭木の剪定など、実際に費用のかかることも必要になる。剪定は昔はご自分でされていたものの、今は職人さんに頼んでいるという。というのも、今野さんはここ数年お体を悪くされているからである。それでも続けていく魅力が、町ぐるみ博物館にはあるのだろう。



裏庭のいよかんの木

そして最後に、今後してみたいことがあるかを聞いてみた。「できれば、もし出来たらですが、記念館みたいなのが出来たら、と。平野にある古いものをね、保存できたらなあと思いますね。ただお金が絡むから、難しいですよね」。「平野のことを若い人たちが継承していただければ一番いいですね」。

町屋博物館・今野家に行けば、平野の色々な面白い裏話などを聞かせてもらえるだろう。そして次の世代の人たちが、それを継承していくことが一番望ましいことなのだろうな、と感じた。

町ぐるみ博物館各館の取り組み 11

## 珈琲屋さん博物館



珈琲屋さん博物館外観

一歩足を踏み込めば、昭和30年代をモチーフにした「always3 丁目の夕日」の主題歌が流れる珈琲苑・茶坊主の店内。そこで昔を懐かしみながら語ってくださったのは長澤利恵さんだ。

この「珈琲屋さん博物館」には、その名の通り、数々のコーヒー豆や、コーヒーミル、更には、一点物の有名な焼物の皿やカップまでもが並んでいる。コーヒー豆やコーヒーミルは博物館として活動する以前から集めていたものも多く、今では生産や輸入が終了しているような珍しい品もある。反対に、皿やカップなどは、博物館を始めてから月に1つ程度の割合で購入している。長澤さん自ら様々な窯元を訪ね、一点物のコーヒーカップを焼いてもらうのであえる。陶芸家は茶碗を焼いてもコーヒーカップを焼いた事はない、と洗われる事はしばしばあったという。しかし、「町ぐるみ博物館」の取り組みについて話すと、陶芸家の方にも熱意が伝わり、一点、また一点と有田焼、萩焼、九谷焼などのコーヒーカップが店内に増えていったそう。この数々の焼物のコーヒーカップは、ただの飾りというわけではない。これらを使い、お店の常連のお客さんのお誕生日に、コーヒーを注いでくれるというサービスも行なっている。

そこに、実際の人びとの生活が垣間見え、温かみが伝わってくるように思える。

ところで、「珈琲屋さん博物館」の始まりは、平成13年にさかのぼる。その前の年に、「趣味で集めているコーヒー豆などを公開すれば興味を持つ人がいるかもしれない」と誘われたのがきっかけだ。その後、他の博物館の方がたの熱意、これからの指標をきちんともっている点に感化され「町ぐるみ博物館」への参加を正式に決定。更に、お店を旧平野郷内に移し、「珈琲屋さん博物館」として活動を開始された。

展示を始めたことで、日曜日には「町ぐるみ博物館」巡りのお客さんが増えたと言う。常連のお客さんは、モーニングか「町ぐるみ博物館」終了後に来店する。一方、「町ぐるみ博物館」巡りのお客さんの多くはお昼間に来店するため、お互いに時間がぶつかる事もなくスムーズな入れ替えが自然と行なわれている。8月の第4日曜日は、開店から閉店まで休む暇もなく、食事を摂る事もできない。けれども、他の地域からのお客さんも、ただ、コーヒーを飲み、展示を見て帰るだけでなく、「町ぐるみ博物館」の取り組みなどについて尋ねる事が多い。そこから、コミュニケーションが生まれ、そして、そのコミュニケーションこそが何よりの楽しみであり、原動力となっているようだ。

平野の町づくりを考える会では、月に一回定例会議を行なっているのだが、誰でも参加できるこの会議も平野の町づくりに大きな役割を果たしていると長澤さんは言う。「1つの考えに、輪掛け、輪掛けの連続で、みんなで面白い事を考える場」であり、世代を越えたアイディア交換の場となっているようだ。ただ1つ懸念があるとすれば、高齢化である。年齢に関係なく意見が交換できる場所であっても、まず参加しなければ、話もできない。だから若い人にも参加してほしいというのが長澤さんの考えである。

長澤さんは、「平野郷」の女性ばかりで結成された「女組」という集まりにも属している。ここでの主な取り組みは、昔、路地で遊んだ「遊び歌」の保存である。他にも、剣玉やベイゴマを現代の子供たちに教える活動も行なっている。町屋保存という観点から、「おも路地」が作られてからは、これらの活動の場は「おも路地」に定着した。



一点物のコーヒーカップ

一度は、故郷の平野を離れ、神戸や京都への憧れを抱いた長澤さん。しかし、自分の町が結局は1番だと今では思っている。ふと、昭和30年代頃まで存在した「赤電話」を懐かしむ会話が出た。電話1つをとっても昔あったものがなくなってしまうのは、どこか物悲しい。昔から、住んでいると、不思議とその変化や大切さには気付きづらいが、平野には民間で、残すべきところが計り知れない。

また、「平野郷」の取り組みを実感し、和歌山や京都からアドバイスを求めて会の定例会議に参加される方がたもいらっしゃるそうだ。自分の町を大切に思う気持ちはどこでも一緒なのは、昨今流行りの「村おこし」からも分かる。

時代と共に進歩すべきもの、次の世代に受け継ぐため守ってゆくべきもの。この2つの境界線の曖昧さについて考えさせられた。

## へっついさん博物館

へっついというのはカマドのことで、パソコンでも“へっつい”と入力して変換キーを押せば「竈」と変換してくれる。しかし、現代人にとっては耳慣れない言葉だ。たとえ、カマドといったところで実物を見たことのある人は少ないだろうし、ましてやそれでご飯を炊ける人はほとんどいないに違いない。



復元されたカマド

京政食堂で常時開館している「へっついさん博物館」では、実際に使うことができる“へっついさん”が展示されている。これはHOPEゾーン計画の修景事業で店先を改装した際に作られたものだそうだ。また、ミニチュアのカマドも展示されている。電気やガスを使わず薪で炊くカマドは、一見すると懐古趣味的に見える。しかし、「へっついさん博物館」を運営する長尾幸男氏はそういう観点で竈を展示しているわけではなく、“新しい方法”としてのカマドを考えているのだ。それはバイオマス（註1）から作ったエコ燃料を使うもので、ゆくゆくはペレットを使ったカマドができるかもしれないという夢を語っていただけた。もちろん、一朝一夕にできることではないが、そういうことを考える楽しさが「へっついさん博物館」を続けていく原動力にもなっているという。

ここではへっついさんだけではなく、手作りの「平野蒟蒻」も名物になっていて、京



平野蒟蒻

政食堂で食べることができる（註2）。平野蒟蒻は近松門左衛門の浄瑠璃にも登場する、歴史ある一品で、銀杏・ヒジキ・ニンジン・ゴマが入った、かやく蒟蒻である。ただ、平野では大正時代にはすでに蒟蒻芋が栽培されており、現在は群馬県から蒟蒻芋を仕入れているとのことである。この蒟蒻はなかなかの人気商品で、数量限定販売のため、売り切れていることもあるそうだ。

また、2007年8月の「平野 町ぐるみ博物館」開催日には、笑福亭仁福さんを招いて寄席が開かれ、「へっつい泥棒」、「へっつい幽霊」が口演された。500円という安い入場料もてつだって、およそ50席設けられた客席は、地元の人たちでほぼ満席に近い状態だった。なお、2008年の8月にも寄席の開



カマドのミニチュア

催を計画しておられるようなので、落語好きのかたは要チェックである。

長尾氏は平野郷で生まれ育っておられ、杭全神社の夏祭りの役員も努められている。また、平野言葉の収集もされているという、生粋“平野人”だ。そんな長尾氏に、平野郷のどういふところが昔と変わったかと質問してみたところ「郷の外は田んぼと畑ばかりやったけど、郷内には昔は映画館とか芝居小屋もあって、もっとにぎやかでしたよ」との答えが返ってきた。現在、平野郷内にはマンションなどが建って新しい人たちも入ってきてはいるが、平均年齢はやはり上がってきているという。ある調査で、商店街を歩く人の平均年齢を調査したところ、隣の東住吉区にある駒川商店街よりも、10歳ほど高いという結果が出たそうだ。



京政食堂とへっついさん博物館

かつての活気をそのまま取り戻すことは難しいかもしれないが、それを懐かしんでばかりいても前には進まない。へっついさんにそういうメタファーを感じてしまうのは、おそらく深読みのしすぎというものだろう。

(註1)

エネルギー源または化学・工業原料として利用される生物体。また、生物体をそのように利用すること。(三省堂『スーバー大辞林』電子辞書版より)

(註2)

京政食堂は日曜・祝日が休業日となっている。「平野町ぐるみ博物館」の開催日は営業されていないので注意。

各館の取り組み 13

## 平野郷民俗資料館・坂井家

\*現在休館中



平野郷民俗資料館・坂井家外観

坂井家は両替屋と質屋を営みながら、町年寄などを努めた旧家である。平野郷民俗資料館は、この坂井家に伝わる近世期の生活民具を中心に展示する博物館で、お歯黒の道具や煙草盆などといった、実際に使われていたものばかりだ。ほかにも、杭全神社などで行なわれていた「大阪相撲番付」や平野郷内の商店の引札(チラシ広告)や古地図、古文書などを見ることがもできる。



炭屋太兵衛一家使用の古民具

もともとは年に1、2回開催されていた「お宝探検隊」という行事に参加したのをきっかけとして、空いていた借家で展示したのが始まりだそうで、そのときに展示されたのは、両替商の象徴ともいえる、天秤や分銅などの道具類だった。その後、「平野町ぐるみ博物館」に参加するようになり、月に1回「平野郷民俗資料館」を開館することになった。



両替商当時の天秤

開館時間は1時～4時までだったが、その間はひっきりなしに人が来るという感じだったそうだ。年間1000人という来館者を聞くと、それもうなずける。

生活民具のほかには、「古伊万里陳列館」として、伊万里焼が数多く展示されている。こちらは染付の古伊万里が中心で、阪井家の蔵に収蔵されていたもののほかに、阪井氏が自ら収集したものも含まれており、遠くから見に来る伊万里ファンも少なくない。

また、阪井氏は「地元の博物館はもっと人に身近であるべきだ」という持論を持たれている。理想とする博物館は、硝子ケースの中に入っているものを遠くから眺めるというのではなく、見て、触って、体感する博物館である。だからここ、平野郷民俗資料館では実際に手にとって見る事ができるものもあるそうだが、かといって、勝手に触ったりするなどというのは言語道断。「見に来た人に

喜んでもらえたり、共通の喜びを感じられたりするのがうれしい」という阪井氏の気持ちを裏切らないためにも、こういうときこそ、見る側のモラル意識が高いレベルで要求されることを忘れてはならない。

最後に、平野の町並みについてたずねてみたところ「平野郷のいいところは古い町並みと新しい町並みが混在しているところ」との答えが返ってきた。一番大事なことは町が活きていることであって、それが町の活性化になるということなのだろう。古いものを大切にすぎるあまり、現在住んでいる人のことを考えなくなってしまうのでは、確かに本末転倒である。

なお、残念ながら「平野郷民俗資料館」は現在、休館中となっている。阪井氏のご都合はあるが、できることなら復活してほしい博物館である。



古伊万里陳列館

## 河内木綿と平野郷1 河内木綿の歴史

昔、河内地方（今の大阪府東部）では綿栽培や木綿織が盛んだった。江戸時代から明治時代のはじめにかけて、河内地方で栽培された綿から糸を紡いで手織りされた木綿のことを、「河内木綿」という。

日本で綿が広く栽培されはじめたのは、15世紀末頃の戦国時代といわれている。当時、木綿は朝鮮半島から輸入された高級品で、丈夫で保温性にすぐれたこの生地は、あたらしい衣料として次第に広まっていった。そして、木綿の原料となる綿も国産化が試みられ、三河地方などで作られるようになった。

河内地方でいつごろから綿が栽培されたのかは、はっきりとはわからないが、少なくとも江戸時代の初めころにはかなり栽培されていたようだ。

江戸時代の17世紀になると、河内での綿栽培や木綿生産が盛んであったことはいくつかの記録で明らかになっている。江戸時代の寛永15年（1638）に成立した『毛吹草』という本には、河内の特産のひとつとして「久宝寺木綿」が紹介されているし、貝原益軒が旅の記録として元禄2年（1689）に書いた『南遊紀行』によれば「河内は綿を多く栽培し、とくに東の山のふもとあたりが多く、その綿から織った山根木綿は京都で評判となっている」と記されている。

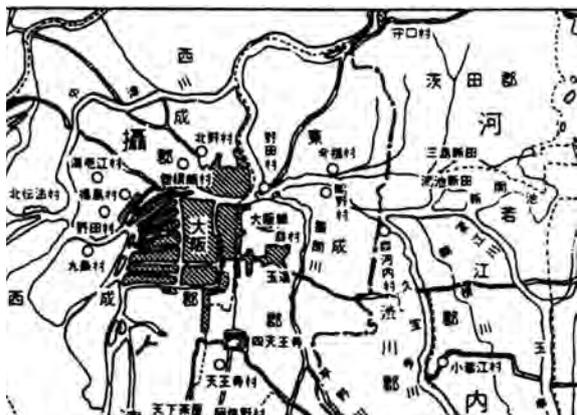


図1 大和川付替図（柏原市史より）

さらに、18世紀のはじめ、宝永元年（1704年）に大和川が付け替えられると、それまでの川床は畑として生まれかわり、綿作りがますます盛んになり、木綿織りはさらに発展した。18世紀中ごろの久宝寺村（現在の八尾市）の田畑の作付状況の記録によれば、村の耕地の7割に綿を植え付けたと記されている。

また八尾や久宝寺などの在郷町や、周辺の村々に木綿を扱う商人たちが増え、仕入れや販売の競争がはげしくなった。宝暦5年（1755）には、八尾の木綿商人の仲間と、高安山麓の木綿商人仲間が、商売の仕方についての取り決めをしている（宝暦5年正月「山の根き組定書」西岡文書、八尾市史史料編）。



図2 三組仲買商村別分布図

河内地方に存在した3組の木綿仲買仲間のそれぞれの内買場（縄張り）の分布。（八尾市立歴史民俗資料館『開館20周年記念特別展 河内木綿—歴史と資料—』より）

やがて明治時代になると、外国から繊維の長い綿や細い糸が安い値段でたくさん輸入されるようになった。そして、それまで手で紡いでいたのが、工場の機械で一度にたくさんの糸が紡げるようになった。

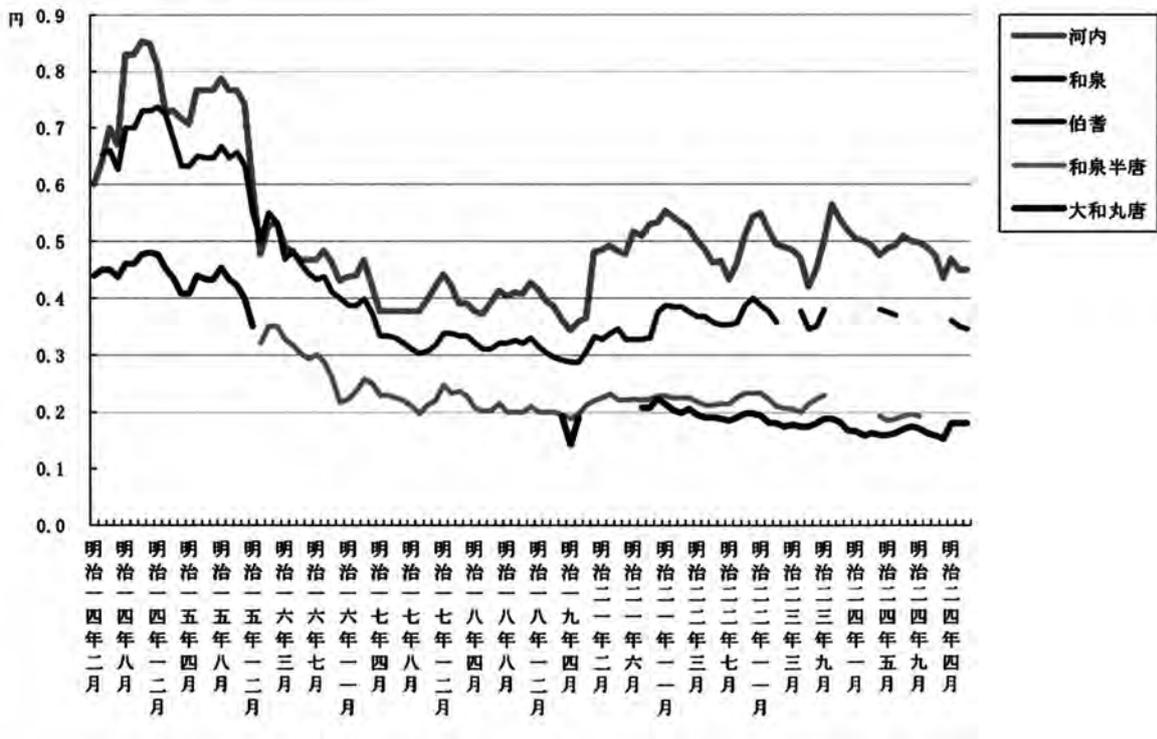


図3 明治中期各地の木綿価格の推移

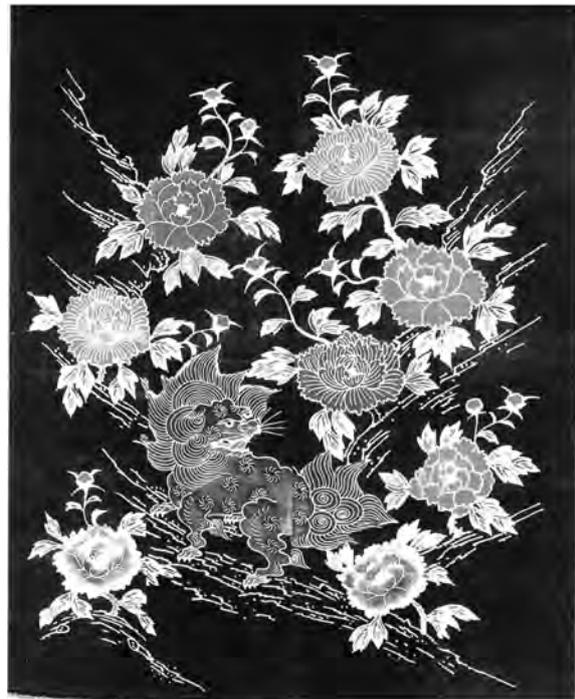
河内・和泉・伯耆・和泉半唐・大和丸唐の各ブランドが徐々に値下がりしている様子がわかる。中でも河内木綿は比較的高い値がついており高価格品種として扱われたが、それが却って衰退へと転じた。(八尾市立歴史民俗資料館 同書より)

河内の綿は外国の綿に比べて繊維が短く糸が太いため丈夫で長持ちしたが、機械で紡ぐことには適しなかった。また、染料も化学染料の使用が始まり、藍などの植物染料で染めたものは少なくなっていった。こうして、明治30年代には、産業としての河内木綿は終わりを告げた。

とはいえ、手で紡いだ糸を植物染料で染め、手で織った「河内木綿」は、地元農家の嫁入りなどで仕立てられる木綿の婚礼蒲団などとして、しばらくは残っていたようで、大正時代頃までは「婚礼荷物で用意する木綿の蒲団はやはり本当の河内木綿でないと」と言われていたそうだ。今日、河内の旧家などに残っている「河内木綿」は、そういうしきたりや儀式の世界に残ったものが多いようだ。

近代化に伴ってそうした習慣は次第に少なくなり、江戸時代以来の伝統を受け継いだ「河内木綿」は、戦前までに姿を消してしまいましたが、河内の人々の暮らしを豊かにした河内木

綿は、今なお河内の人々にとって郷土の誇りであり、その素朴な風合いは、河内だけでなく多くの人々に愛されている。



唐獅子牡丹文筒描布団地 (八尾市立歴史民俗資料館蔵)

## 河内木綿の特徴

### 1、木綿の科学的性質

木綿は羊毛や絹などと同じく、天然繊維に分類され、図1に示されているとおり、層状の構造をなしている。表皮は一番外側の部分にあたり、紫外線などから繊維を保護するためのワックスやペクチン質が主成分となっている。第1次層は主としてセルロースからなるが、ペクチン質や淡白なども含んでいる。S<sub>1</sub>からS<sub>3</sub>までの層を総称して第2次層と呼び、薄い層のラメラで構成されている。ラメラはマイクロフィブリルと呼ばれる、およそ1000本のセルロース分子からなっている（セルロースの分子は5～6nm）。このマイクロフィブリルが20～30度の螺旋角を持って螺旋構造をなしている。その中心が中空構造になっているため、保温性、保湿性が高いことに加え、染色が容易である。

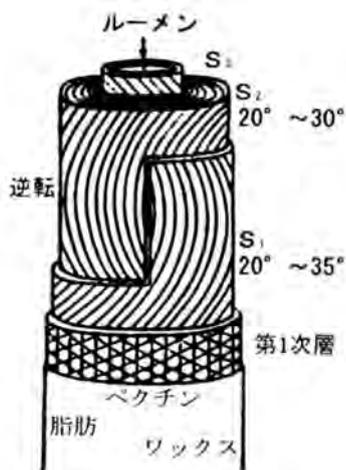


図1 木綿繊維の模式図

木綿はほかの繊維に比べて引っ張り強度は強く、化学繊維であるナイロンやポリエステルと比べても遜色はない（表1）。次に、少々意外に思われるかもしれないが、木綿の繊維は伸びないという性質も持っている。破断伸び率を見ると、その値はFRPなどに使われるガラス繊維とほぼ同じである。また、同じ

繊維名	引張り強さ (g/D)	破断伸び率 (%)
綿	3.0～4.9	3～10
羊毛	1.0～2.0	20～40
絹	3.3～4.2	17～21
レーヨン (普通)	0.7～3.2	15～30
アセテート	1.2～1.4	23～45
ナイロン66 (普通)	4.1～5.8	26～40
ナイロン66 (普通)	3.0～6.0	26～40
ポリエステル (普通)	4.6～5.0	19～23
アクリル	2.4～4.0	25～46
ガラス	6.3～6.9	3～4

表1 繊維の引張り強さと破断伸び率

D=denier. g/Dは1デニールあたり何gまで耐えられるかをあらわす。

繊維名	磨耗寿命
綿	39
羊毛	3
絹	7
レーヨン	20

表2 繊維の磨耗寿命

金剛砂の摩擦子を用いて、繊維が破断するまでのローラーの回転数

天然繊維の羊毛や絹に比べ、はるかに磨耗に強いことも大きな特徴である（表2）。

### 2、河内木綿の特徴

河内木綿は、外来品種である米綿や海島綿に比べて繊維が短いのも特徴である。この繊維としての河内木綿の性質は、生地としての河内木綿の性質にも大きな影響を与えている。繊維の長さが短いということは、糸を紡ぐ際に細く紡ぐことができないということにつながる。したがって、河内木綿の生地はいきおい、厚くて丈夫なものになる。布団地や風呂敷などに使われるならこのままでいいが、着物にするにはやや肌触りが悪い。しかし、丈夫な河内木綿は何度も洗うことができ、生地はだんだんとやわらかくなっていく。また、絹のように砧で叩いて光沢を出す技法を用いることもできた。

また、河内木綿を織る際に使われる下機（写真1）は、普通の機に比べて台の傾斜角がきつくなっている。普通は箆を手前に引く感じで緯糸を打ち込むが、この機の場合、下に

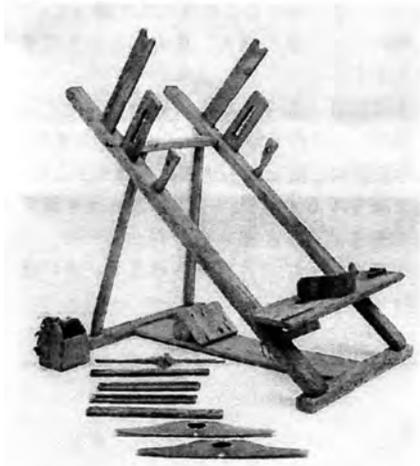


写真1 八尾市で見つかった下機

打ち下ろす感じになるので、より強い力で緯糸を打ち込むことができる(写真2)。これも河内木綿の丈夫さに一役買っていると思われる。そんな河内木綿は仕事着や布団地、酒袋(酒を搾る際に使われる袋)などとして利用されたほか、布団の中綿にもなった。中綿には、繊維が短く、弾力の強い河内木綿が向いていたのである。

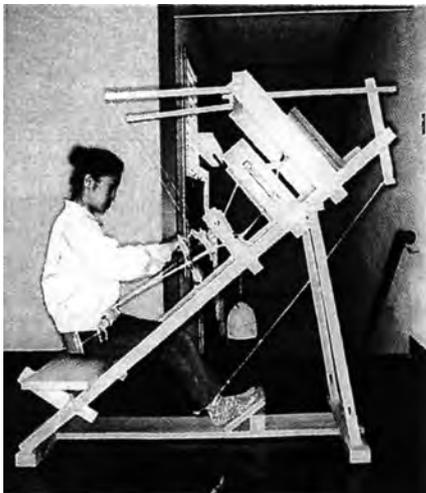


写真2 機を織る様子

(写真1 個人蔵(八尾市歴史民俗資料館展示解説資料より)  
写真2 八尾市歴史民俗資料館蔵(同展示解説資料より))

### 3、河内木綿の文様

さまざまな文様があるのも河内木綿の特徴である。織で出される模様には二棒縞や格子縞などがあり、染めでは菊花文や唐草文などのほかに、鶴や亀といった吉祥文が多い。染色には主として藍を用いた型染めであるが、

生成りで出荷された河内木綿が各地で染められることも多く、染色の意匠をもって河内木綿を判断することは難しいといわれている。

### 4、河内木綿の判別

手紡ぎ、手織りの布地と機械紡績、機械織の布地の区別は、光学的観察、つまりは眼で見て判断されることが多い。手紡ぎで作られた糸は、紡績糸のように太さが均一にはならないため、織物になったときムラができるので、それを見ることである程度判別することができるのである。デジタルマイクروسコープを使えば、糸の太さを容易に計測することができるので、多くのデータを収集すれば、手紡ぎ糸の太さに統計上の特徴が現れる可能性は残されている。

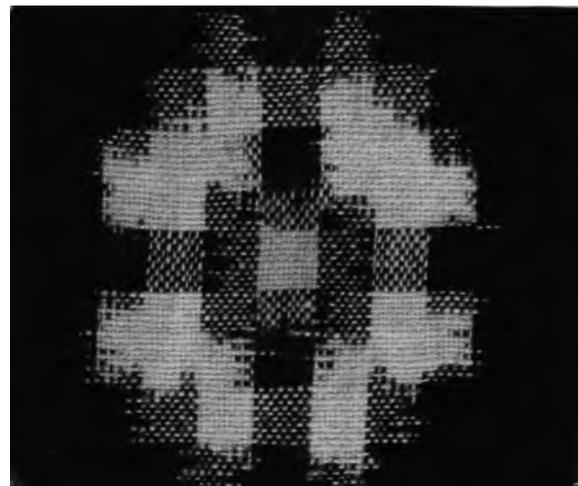


写真3 通常のカメラで撮影した木綿



写真4 マイクروسコープで撮影した木綿  
(写真3・4 「河内木綿譜」より)

## 平野郷について

大阪市の南東端に位置する平野区は、1974年に東住吉区から分離して誕生した区で、面積は15.30km<sup>2</sup>、総人口200,647人（推計人口、2008年2月1日）とされている。また、かつて河内木綿の一大集散地であったことから、区花には綿花が指定されている。その地名は平安時代末期にさかのぼることができ、戦国時代には平野七名家を称する家々（末吉家、土橋家、辻花家、成安家、西村家、三上家、井上家）が中心となって集落の周囲に環濠を掘り、自治権を行使する環濠自治集落、平野荘となり、高野街道や大和街道をはじめとた街道が交わる交通の要衝として発展した。この平野荘が近世になると、平野郷と呼ばれるようになったのである。環濠は平野川ともつながっており、自衛や灌漑などとしての機能のほか、舟運の水路にもなっていた。近世期には柏原船が往来し、繁栄の源になったが、現在はごく一部が残されているのみである。



現在も残る環濠跡

平野郷には数々の歴史的建造物がある。一帯の氏神である杭全神社は、社伝によると貞観4年（862）の創建とされ、坂上田村麻呂の孫、坂上当道が素盞鳴尊を勧請したのがその起源であると伝えられている。ここには日本で唯一の連歌所（大阪市指定文化財）が残されている。この連歌所は大阪冬の陣で焼か

れた後、宝永5年（1708）に再建されたもので、現在も連歌の会が催されている。また、杭全神社の夏祭りはだんじりでも有名で、宮入は夏の風物詩となっている。平野郷内を歩くと、各所にだんじり小屋があることに気づく。だんじりは各町ごとに1基あり、地域の人びとを結びつける象徴ともなっている。

仏教寺院では、融通念仏宗の総本山、大念佛寺がある。融通念仏宗は大念仏宗とも言われる浄土教の宗派のひとつで、永久5年（1117）良忍が開いたといわれる。大念佛寺



大念佛寺本堂

の創建は大治2年（1127）とされ、本堂は大阪府下最大の木造建築物である。国宝の毛詩鄭箋残巻をはじめ、多くの有形文化財を有していることで知られているが、毎年5月に行なわれる「万部おねり」という荘厳、かつ華麗な練供養も、大阪市指定無形民俗文化財となっている。夏には「幽霊博物館」として「平野町ぐるみ博物館」にも参加しており、所蔵している幽霊の掛軸や「亡女の片袖」を公開している。その人気は炎天下にもかかわらず、行列ができるほどである。

大阪を代表する私塾として懐徳堂と肩を並べた含翠堂もこの平野郷に構えられていた。含翠堂が開かれたのは享保2年（1717）で、生活に必要な基本道徳を学ぶことを目的としていた点に特色があり、学問を教えるだけでなく、飢饉の際には人民救済事業も行なっていた。初期には陽明学者の三輪執斎、後には篠原正旦、懐徳堂門下の早野反堂のほか、伊



含翠堂跡石碑碑文

藤東涯や藤澤南岳などが講師として招かれた。明治5年（1872）に学制が發布され、150年にわたる歴史に幕を閉じたが、含翠堂の跡地には現在石碑が建てられ、その功績を偲ぶことができる。

また、平野郷は大阪市が進めるHOPEゾーン事業の指定を受けている地域でもある。HOPEゾーン事業は、歴史的、文化的価値の

ある町並みを持つ地区などが指定され、平野郷地区のほかに、住吉大社周辺地区、空堀地区が事業の対象となっている。この事業の特色は行政と地域住民が協力しながら進めていくという点にある。平野郷地区の場合、町並み修景事業として、おも路地の整備や歴史的家屋の復元が行なわれ、最終的には景観を保護するための建築規制条例を制定するまでにいたっている。

このように、平野郷はなにわ・大阪の歴史を語る上で欠かすことのできない地域である。現代社会の中では変容せざるを得ない部分はあるが、核となる部分は残されている。それが時代を超えて平野郷に住む人びとに連綿と受け継がれてきた財産、すなわち文化遺産なのである。



攝州平野大絵圖

## 協力者一覧

平野の町づくりを考える会

平野・町ぐるみ博物館

パズル茶屋

平野映像資料館

自転車屋さん博物館

幽霊博物館

新聞屋さん博物館

くらしの博物館

鎮守の森博物館

小さな駄菓子屋さん博物館

平野の音博物館

和菓子屋さん博物館

町家博物館・今野家（2008年3月閉館）

珈琲屋さん博物館

へっついさん博物館

平野郷民俗資料館・阪井家（2008年3月閉館）

八尾市立歴史民俗資料館

李 熙連伊（学芸員）

## 編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No.6 をお届けいたします。

「もめん博物館」当日は好天に恵まれ、240名もの方が「もめん博物館」に立ち寄ってくださいました。糸車を見て懐かしいと仰る年配の方や、一日中綿くりのハンドルを夢中で回す小学生。染色体験の方では一生懸命ハンカチ全面を絞りにする方、多色染めに挑戦する方…と、本当に色々な方とふれあうことが出来ました。アンケートを取るために町に散らばった R.A. も皆、多くの館を回って町の人たちとふれあうことが出来たようです。

その後12月に行なった「町ぐるみ博物館」参加各館への聞き取り調査では、皆さん快く取材に応じてくださいました。取材ではご自分の趣味でもある展示物の内容から「町ぐるみ博物館」全体のこと、更には町づくり全体のことなどを熱く語っていただきました。ついつい長居してしまい、予定時間をオーバーすることも多々ありました。

また「もめん博物館」の結果報告を行った「平野の町づくりを考える会」の定例会議では、温かい言葉とともに、ぜひとも継続すべきだという熱い言葉もいただきました。今回結ぶことが出来た縁を、今後とも紡いでいけたらと考えています。

本書刊行にあたり、「平野 町ぐるみ博物館」を主催する「平野の町づくりを考える会」の皆様、および事務局である野中山全興寺住職川口良仁氏にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

本号の表紙は綿くり機と糸車の写真、裏表紙は河内木綿の綿実をデザイン化したものです。また中表紙の題字は当日の看板から作成しました。

(編集 影山陽子)

---

---

Kansai University Research Center for

**Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 6**

地域連携企画第3弾 **もめん博物館 in 平野**

発行日 2008年3月31日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所 (株) 廣濟堂

---

---